

照葉狂言

泉鏡花

青空文庫

鞠唄
の堂

仙冠者

野衾

狂言

夜の辻

仮小屋

井筒

重井筒

峰

鞠唄

一

二坪に足らぬ市まちなか中の日蔭の庭に、よくもこう生い立ちしな、一ひともと本の青あおかえで楓、塀の内に年経たり。さるも老木おいきの春寒しとや、枝も幹もただ日南ひなたに向いて、戸の外にばかり茂りたれば、広からざる小路の中を横ぎりて、枝さきは伸びて、やがて対向むかいなる、二階家の窓とどに達かんとす。その窓に時々姿を見せて、われに笑顔向けたまうは、うつくしき姉上なり。

朝な夕な、琴弾きたまうが、われ物心覚えてより一日ひとひも断ゆることなかりしに、わが母みまかりたまいし日よりふと止やみぬ。遊びに行きゆし時、その理由わけ問いたるに、何ゆえというにはあらず、飽きたればなりとのたまう。されど彼家かこなる下婢かひの、密ひそかにその実まことを語りし時は、稚おさなごころ心にもわれ嬉しく思い染そみぬ。

「それはね、坊ちゃん、あの何ですツて。あなたのね、母様がおなくなり遊ばしたのを、御近所に居ながら鳴物もいかな訳だツて、お嬢様が御遠慮を遊ばすんでございませよ。」

その隣家に三十ばかりの女房一人住みたり。両隣は皆二階家なるに、其家ばかり平家にて、屋根低く、軒もまた小かなりければ、大なる凹の字ぞ中空に描かれたる。この住居は狭かりけれど、奥と店との間に一の池ありて、金魚、緋鯉など夥多養いぬ。誰が飼いはじめしともなく古くより持ち伝えたるなり。近隣の人は皆年久しく住みたれど、そのみはしばしば家主かわりぬ。さればわれその女房とはまだ新らしき馴染なれど、池なる小魚とは久しき交情なりき。

「小母さん小母さん」

この時髪や洗いけん。障子の透間より差覗けば、膚白く肩に手拭を懸けたるが、奥の柱に凭りかかれり。

「金魚は、あの内に居るか。」

「居ますとも、なぜ今朝ツからいらっしやらないツて、待ってるわ、貢さん。」

「そう。」

「あら、そう、じゃアありません、お入りなさいよ、ちよいと。」

「だつて開かないもの、この戸は重いねえ。」

手を空ぎまに、我が丈より高き戸の引手を押せば、がたがたと音したるが、急にずらりと開く。婦人は上櫃おんなあがりがまちに立ちたるまま、腕かいなを延べたる半身ななめ、斜ななめに狭き沓くつぬぎ脱ぬぎの上に蔽おほわれかかれる。その袖の下を搔かいくぐ潜ひそりて、衝つと摺すりぬ抜けつつ、池ある方かたに走り行くをはたはたと追いかけて、後うしろより抱いだき留とどめ、

「なぜそうですよ。金魚ばかりセツついて、この児こは。私ともお遊びつてば、厭いやかい。」
と微笑ほほえみたり。

「うむ。」

「うむ、じゃアありません。そんなことをお言いと私や金魚を怨うらみますよ。そして貢くさんのお見えなさらない時に、焼火箸やけひばしを押おつつけて、ひどい目に逢あわせてやるよ。」

「厭いやだ。」

「それじゃ、まあお坐すわんなさい。そしてまた手鞠歌てまりうたを唄うたってお聞かせな。あの後が覚えたいからさ。何というんだつけね。……二両で帯を買かうて、三両で紵くけて、二両で帯を買かうて、それから、三両で紵くけて、そうしてどうするの、三両で紵くけて……」

「今年はじめて花見に出たら、寺の和尚に抱き留められて。」

とわれは節つけて唄い出しぬ。

おんな
おんなは耳を澄して聞く。

「寺の和尚に抱き留められて、止しやれ、放しやれ、帯切らしやるな。」

「おや、お上手だ。」と障子の外より誰やらむ呼ぶ者ありけり。

二

「誰？」と言いかけて走り出で、障子の隙間より戸外を見しが、彼は早や町の彼方に行く、その後姿は、隣なる広岡の家の下婢なりき。

「貢さんが、お上手だもんだから。立って聞いてたの。それはね、唄も節もまるで私たちが知ってるのと違うんだもの。もつと聞かして下さい、後でまた昨日の続きのお話をして上げますから。」

この婦人、昔話の上手にて、稚きものにもよく分るよう、可哀なる、おかしき物語して聞かす。いつもおもしろき節にて止めては、明くる日その続きをと思うに、まずわれに鞠

歌を唄わしむるなり。

「高い縁から突き落されて、笄こうがい落し、小枕落し……」

と唄い続けつ。頭かしらを垂れて聞き果てたり。

「何だか可哀あわれつぼいのね。鬱ふさいで来るようだけれど、飛んだおもしろいよ。私たちの覚え

たのは、内方うちかた袖方そでかた、御手おんてに蝶や花、どうやどうんど、どうやどうんど、一丁、二丁、

三丁、四丁ツてもう陽気なことばかりで、訳わけが解らないけれど、貢さんのはまた格別だね

え。難ありがと有うござんした。それではちようど隙ひまだし、昨日のあの、阿銀おぎんこぎん小銀のあとを話し

てあげましょう。」

とて語り出づる、大方の筋は継母ままははのその継ましき兒こに酷むじきなりけり。

「昨日はどこまで話しましたツけね、そうそう、そうするとね、貢さん、妹の小銀と云う

子が感心じゃありませんか。今の母おつかさん様の子で、姉ねえさん様の阿銀とはお肚なかが違っているの

だけれど、それはそれは姉おもいの優しい子で、姉様が継母の悪だくみで山へ棄てられる

というのを聞いて、どんなにか泣いたろう。何てツて頼んでも、母様は肯きき入れないし、父お

様とつさんは旅の空。家来や小者はもうみんなが母様におべつかつてるんだから、誰一人執成とりな

してくれようと云うものはなし、しかたがないので、そつとね、姉様が冤むじつの罪を被きせられ

て——昨夕話したツけ——冤というのは何にも知らない罪を塗りつけられたの。納屋の中に縛られている処へ忍んで逢いに行つてね、言うようには、姉さん、私がどんなにか母様に頼んだけれど、どうしても堪忍しませんから、一旦連れられておいでなさいまし。後でまたどうにでもしてお助け申しましょう。そうして、いらツしやる処が解らないでは、お迎いに行くことが出来ませんから、これを……ツて、そう云つて、胡麻を一掴、姉様の袂へ入れてあげたの。行く道々、中の絶えないように、そこいらに撒いておいでなさい。それをたよりにして逢いに行くツて、まあ、賢いじゃありませんか、小銀はようよう九つ。

その晩は手を取りあツて、二人が泣いて別れて、明日になると、母様の眼を忍んで小銀が裏庭へ出て見ると、枝折戸の処から、点々ずつ、あの昨夜の胡麻が溢れ出して、細い、暗い、背戸山の坂道へかかっているのを、拾い拾い、ずつとずつと、遠い遠い、路を歩いて、淋しい山の中へ入ツて行ツたの。そうするとね、新らしく土を掘りかえした処があツて、搔寄せたあとが小高くなツてて、その上へ大きな石が乗ツけてあツて、そこまで小銀が辿つて行くと、一条細うく絶々に続いていた胡麻のあとが無くなつていたでしよう。

もう疑うことはない。姉様はこの中に埋れられたな、と思ひながら、姉さん、姉さんと地に口をつけて呼んでみても返事がないから、はつと思つて、泣伏して、耳をこう。」

言いかけて婦人は頭を傾け、顔を斜に眼を瞑りて手をその耳にあてたるが、「ね。」とばかり笑顔寂しく、うつとり眼を開きてわが顔をば見し。戸外には風の音、さらさらと、わがいえ我家なるかの楓の葉を鳴して、町のはずれに吹き通る、四角あたり夕戸出の油売る声遥なり。

三三

一しきり窓あかるく、白き埃見えたるが、早ものに紛れてくらくなりぬ。寂しくなりたれば、近寄りて婦人の膝に片手突きぬ。彼方も寒くなりけむ、肌を入れつ。片袖を掛けてわが背を抱きて蔽いながら、顔さし覗く状して、なお肅かにぞ語れる。

「そうすると、深い深い、下の方で、幽に、姉の阿銀がね、貢さん、（ああい。）てつて返事をしましたとさ。」

それからまた精一杯な声で、姉さん姉さんッて呼んだの。そうすると、ああ、もう水が

出て、足の裏が冷たくツて冷たくツて、と姉さんがお言いだとね。土を掘ったのだから、水が出ますわ。

どうぞして、上の石を退けて出してあげようとおしだけれど、大きな男が幾人もかかって据えたものを、どうして小銀の手に合うものかね。そちこちするうち日が暮れそうだから、泣き泣きその日は帰ってしまったて、翌日また尋ねて行って、小銀が（小銀が来ましたよ、小銀が来ましたよ。姉さん、姉さん、どこまで水がつかしました。）ツて、問うたればね、膝まで水がつかましたツて、そうお言いだとき。そのあくる日は、もう股の処へついたツて。またその翌日行つた時は、お腹の上まで来たんですとね。そうしてもうそうになると、水足が早くなつて、小銀が、姉さん、姉さんツて聞く内に、乳の下まで着いたんだよ。山の中は寂りして、鳥の声も聞えない。人ツ子一人通ろうではなし、助けてもらうわけにはゆかず、といつて石は退けられないし、ただもうせめてのことに、お見舞をいふばかり、小銀が悲しい声を絞つて。」

この時婦人は一息つきたり。可哀なるこの物語は、土地の人口碑に伝えて、孫子に語り聞かす、一種のお伽譚なりけるが、ここをば語るには、誰もかくすなりとぞ。婦人もいま悲しげなる小銀の声を真似むとて、声繕いをしたりしなり。

「（姉さんや、姉さんや、どこまで水がつかまりました。どこまで水がつかまりました。もう一度顔が見たいねえ！ 小銀が来ましたよう。）ツて、呼んでも呼んでも返事がないの。もう下で口が利けなくなつたんでしよう。小銀の悲しさは、まあどんなだつたらうねえ。叶わないとは思つても、ひよつと聞えようかと、（姉さんや、姉さんや、どこまで水がつかまりました。）阿銀さん、姉さんツて、はつと泣き倒れて、姉さん、姉さん。」

と悲しき声す。先刻より我知らず悲しくなりしを押し耐えていたりしが、もはや忍ばずなりて、わつと泣きぬ。驚きて口をつぐみし婦人は、ひたと呆れし状にて、手も着けでぞ瞻りける。

門の戸引開けて、衝と入りざま、沓脱に立ちて我が名を慌しく呼びたるは、隣家なる広岡の琴弾くかの美しき君なり。

「あれ。」とばかりに後にすきりて、後ざまにまたその手を格子戸の引手にかけし、遁も出ださむ身のふりして、面をば赧らめたまえる、可懐しと思う人なれば、涙ながら見て、われは莞爾と笑いぬ。

「まあ私はどうしたというのでしょうか。」
かく言いかけて俯向きたまえり。

「どうぞ、さあどうぞお入りなさいまし。お嬢様まことに散らかしておりますが。」
此方も周章こなたあわてていう。

「はい、まだしみじみ御挨拶ごあいさつにも上りませぬのに、失礼な、つい、あの、まあ、どうしたら可ようございましょう。」

詮せん方かたなげに微笑ほほえみたまいつ。果はては笑いとこそなりたれ、わがその時の泣声の殺されや
すると思うまで烈はげしき悲鳴なりしかば、折しも戸に倚よりて夕暮の空を見たましいしが、われ
にもあらで走入りたましいなりとぞ。されば、わが泣きたるも、一つはこの姉上の母の、
継母ぞということをば、かねて人に聞きて知ればなりき。

四

うつくしき君の住すまいたるは、わが町家まちやの軒のらならびに、比なびなき建物にて、白壁しろかべいかめ
しき土蔵も有りたり。内証いたは太いたく富とめりしなりとぞ。人ひと数は少ひとなくて、姉上と、その父
と、母と、下婢かひとのみ、もの静しずなる仕舞家しもたやなりき。

財産持てりというには似で、継母なる人の扮装みなりの粗末まさよ。前垂まえだれも下婢と同じくした

り。髪は鵲の尾のごときものの匆ね出でたる都鬘みやこまげというに結びて、齒を染めしが、ものいう時、上下うへしたの齒ぐき白く見ゆる。

年紀は四十に余れり。われをば睨みしことあらざれど、遊びに行けば余り嬉しき顔せず。かつて夜に入りて、姉上と部屋にて人形並べて遊びしに、油こそ惜しけれ、しかることは日中ひなかにするものぞと叫びぬ。

われを憎むとは覚えぬ、内に行くことをこそ好まざれ、外おもてにて遊ぶ時は、折々ものくれたり。されどかの継母の与えしものに、わが好ましきはあらざりき。

節句の粽貫ちまきいしが、五把ごわの中に篠ばかりなるが二ツありき。杏あんず、青梅すもも、李すももなど、幼き時は欲しきものよ。広岡の庭には実のなる樹ども夥多あまたありし、中にも何とかいう一種李の実うすたかの、またなく甘かりしを今も忘れず。継母の目のなきひまに、姉上の潜ひそかに取りて、両手に堆うずたかく盛りてわが袂たもとに入れたまいしが、袖の振ふりあきたれば、喜び勇みて走り帰る道すがら大方は振り落して、食くべむと思おもうに二ツ三ツよりぞ多からざりける。

継母はわずかに柿の実二ツくれたり。その一顆ひとつは渋かりき。他の一顆を味あじわわむとせしに、真紅の色の黒ずみたる、台うてななきは、虫のつけるなり。熟せしものにはあらず、毒なればとて、亡き母棄てさせたまいぬ。

いつなりけむ、母上の給たまいたる梨なしの、核しんばかりになりしを地に棄てしを見て、彼か処この継母ついで眉まゆを擧ひめ、その重宝じゆうほうなるもの投なぐることは、磨すりおろして汁じゆをこそ飲のみむべけれど、老ま実めだちてわれに言いえりしことあり。

さる継母ついでに養やしやわるる姉上あねがみの身の思おもわるるに、いい知らず悲かなしくなりて、かくはわれ小銀こぎんの譚ものがたりに泣なきしなる。その理いわ由れを語かたるべき我が舌したは余あまり稚おさなかりき。

「まあ、こうなんですよ。お嬢様、ちよいと御覽ごらんなさいまし、子供こどもですnee。」

女房にようぼうは笑わらみつつ言う。そのままにも出いでかねてや、姉上あねがみは内うちに入りいりたまひ、

「まことに失礼しつれいいたしました。私もそそつかしい、考えたつて解とりますのにnee。小母おむさん、悪わるく思おも召めさないで下くださいまし、ほんとにどうしよう私は。」と、ひたすらに詫わびたまいぬ。

此方こなたはただ可お笑かしがりて、

「いいえ、しかし何なにですわ。うっかりした話わはいたされませんね。私も吃びつくり驚おどろしました、だつて泣なきようが太ひどいのですもの。厭いやな人ひとnee。貢たまさん、私わたしや懲こりこり々々したよ。もうもうこんなことは聞きかせません。」と半はんばは怨うらみ顔がほなるぞ詮せん方かたなき。

「でも賢さとしいのね。貢たまさん、よくお解とりだつた。」

と優しく頭撫でつつ、姉上の愛でたまうに、やや面を起せり。

「お嬢様。」とものありげに戸外より下婢の声懸けたれば、かの君はいそがわしく辞し去りたまいぬ。あと追うて出でむとせしを、女房の遮りて、笑いながら、

「あらそのまんまで遁げちやずるいよ。もうひとつ手鞠唄をお聞かせでなくツちやあ……」
再び唄いたり。辞みて唄わざらむには、うつくしき金魚もあわれまた継母の手に掛りやせむ。

仙冠者

一

我が居たる町は、一筋細長く東より西に爪先上りの小路なり。

両側に見好げなる仕舞家のみぞ並びける。市中の中央の極めて好き土地なりしかど、この町は一端のみ大通りに連りて、一方の口は行留りとなりたれば、往来少なかりき。

朝あしたより夕ゆうべに至るまで、腕車くるま、地車じぐるまなど一輛も過ぎるはあらず。美おもいものしき妾めかけいし、富とみみたる寡あはれ婦め、おとなしき女めの童わらわなど、夢おだやかに日を送りぬ。

日は春日山の巔いただきよりのぼりて粟ヶ崎の沖に入る。海は西の方に路程一里半隔りたり。

山は近く、二階なる東の窓に、かの木戸の際なる青楓の繁りたるに蔽おほわれて、峰の松のみ

見えたり。欄よに倚りて伸上れば半腹なる尼の庵いおりも見ゆ。卯辰山うたつやま、霞が峰、日暮の丘、

一帯波のごとく連りたり。空蒼あおく晴れて地の上に雨の余波ある時は、路なる砂利うつくし

く、いろいろの礫こいしあまた洗い出さるるが中に、金色なる、また銀色なる、緑なる、

樺色なる、鳶色なる、細螺きしやごおびただし。轍わだちの跡というもの無ければ、馬も通らず、

おさなきものは懸念なく踞居ついでてこれを拾いたり。

あそびなかまの暮ごとに集いしは、筋むかいなる県社乙おとつるぎ、剣の宮の境内なる御影石みかげいし

の鳥居のなかなり。いと広くて地をば綺麗きれいに掃いたり。榊さかき五六本、秋は木犀もくせいの薫かおりみてり。

百日紅あり、花桐あり、また常磐木あり。梅、桜、花咲くはここならで、御手洗みたらしと後う

合しろうあわ せなるかの君の庭なりき。

この境内とその庭とを、広岡の継母は一重の木槿垣むくげがきをもて隔てたり。朝霧淡くひとつ

ひとつに露もちて、薄紫に薬青しやくく、純白まつしろの、薬赤く、あわれに咲重なる木槿の花をば、

継母は粥かゆに交せて食するなり。こは長寿ながいきする薬ぞとよ。

梨りんの核しんを絞つゆりし汁つゆも、木槿きしんの花を煮こみし粥かゆも、汝なが口ならば旨うまかるべし。姉上あねさまにはいかならむ。その姉上と、大方はわれここに来て、この垣かきをへだてて見まみえぬ。表うらより行ゆかむは、継母のよき顔せざればなり。

時は日ごとに定まらねど、垣根かきねにイめば姉上あねさまの直ちに見えたまう。垂籠たれこめていたまうその居間いまとは、樹こけ々の梢すずえありて遮れど、それと心着きてや必ず庭にわに来たまうは、虫むしの知らずるなるべし。一時あるときは先立ちて園生そのうをそぞろあるきしたまうことあり。さる折まがひには、われ家を出づる時、心の急いそがざることあらざりき。

行ゆきて差さしのぞ覗のぞけば、悄しおれて樹この間に立ちて、首こうべをさげ、肩かたを垂れ、襟えり深く頤おとがいうすを埋めて力ちからなげにイみたまう。病やまい気にやと胸むねまず轟とどろくに、やがて目をあげて此方こなたを見たまう時、莞爾にっこりとして微笑ほほえみたまえば、病やまいにはあらじと見ゆ。かかることしばしばあり。

ひとりひとり独居ひとりたまう時はいつもかなりけむ。われには笑顔見せたまわざること絶えてなかりしが、わがために慰めらるるや、さらば勉つとめて慰めむとて行ゆく。もどかしき垣かきを中なる逢瀬おうせのそれさえも随意まならで、ともすれば意地悪いぢわるき人の妨さまたぐる。

国麿くにまろという、旧もとの我が藩はんの有司ごしの児この、われより三ツばかり年とし紀したけたるが、鳥居とりいの

突^{つき}あたりなる黒の冠^{かぶきもん}木門のいと厳^{いかめ}しきなかにぞ住^{すま}いける。

二

肩幅^{かたはら}広く、胸張^{むねは}りて、頬^ほに肥^し肉^しつき、顔^{まろ}丸^{まる}く、色の黒^{くろ}き少年^{せうねん}なりき。腕^{ちから}力^{ちから}もあり、年^{とし}紀^き

も長^たけたり、門^{たつと}閥^{たつと}も貴^{たつと}ければ、近^{ちか}隣^{りん}の少年^{せうねん}等^らみな国^{くに}曆^{れき}に従^{したが}いぬ。

厚^あ紙^{かみ}もて烏^え帽^{ぼう}子^しを作りて被^{こうむ}り、払^はを腰^{こし}に挿^さしたるもの、顛^{はちまき}卷^{まき}をしたるもの、十^{じゅう}手^てを携^も

えたるもの、物^{もの}干^{ほし}棹^{ざお}を荷^{にな}えるものなど、五^ご三^{さん}人^{にん}左^さ右^うに引^ひ着^きけて、渠^{かれ}は常^{じょう}に宮^{みや}の階^{きざはし}の正^{せい}面^{めん}

に身^み構^{かま}えつ、稻^{いんげん}葉^は太^た郎^{らう}荒^{こうぞう}象^{じやう}園^{えん}の鬼^{おに}門^{かど}なりと名^な告^つりたり。さて常^{じょう}にわが広^{ひろ}岡^{おか}の姉^{あね}上^{かみ}に逢^あ

わむとて行^ゆくを、などさは女^め々^めしき振^ふ舞^まする。ともによべ、なかまにならば、仙^{せん}冠^{くわん}者^{しや}牛^う若^{じやく}

三^{さん}郎^{らう}といふ美^み少^{せう}年^{ねん}の豪^{ごう}傑^{てつ}になさむと言^いいき。仙^{せん}冠^{くわん}者^{しや}は稻^{いんげん}葉^はなにかしの弟^{あに}にて、魔^ま術^{じゆつ}をよく

し、空^{そら}中^{ちゆう}を飛^{ひぎ}行^{ぎやう}せしとや。仙^{せん}冠^{くわん}者^{しや}をわれ嫌^{きら}うにあらねど、誰^{たれ}か甘^{あま}んじて国^{くに}曆^{れき}の弟^{あに}たらむ。

言^いうこと肯^きかざるを太^{いた}く憎^{にく}み、きびしくその手^て下^げに命^{いのち}じて、われと遊^{あそ}ぶことなからしめ

たり。さらぬも近^{ちか}隣^{りん}の少^{せう}年^{ねん}は、わが袖^{そで}長^{なが}き衣^{きぬ}を着^きて、好^よき帯^{おビ}したるを疎^{うとん}じて、宵^よ々^々には組

を造^{つく}りて町^{まち}中^{ちゆう}を横^{よこ}行^{ぎやう}しつつ、我^{われ}が門^{かど}に集^あいては、軒^{のき}に懸^かけたる提^{ちやう}灯^{ちん}に礫^{つぶて}を投^なじて口

々に罵りぬ。母上の名、仮名もてその神燈に記されたり。亡き人に礫打たしては、仏を辱かしめむとて、当時わが家をば預りたまえる、伯母の君他ほかのに取りかえたまいぬ。

かかりし少年の腕力あり門閥ある頭領を得たるなれば、何とて我威を振ふるわざるべき。姉上に逢わむとて木槿垣むくげがきに行く途みち、まず一人物干棹をもて一文字に遮り留とどむ。十手持ちたるが引添まなこいて眼を配り、顛巻したるが肩をあげて睨ねめ着くる。その中にやさしき顔のかの烏帽子被かぶれる児の払はたきをば、国麿の引取りて、背後うしろの方に居て、片手を尻下りに結びたる帯にはさみて、鷹揚おうように指揮さしずするなり。

わびたりとて肯くべきにあらず、しおしおと引返す本意ほんいなき日数ひかずこそ積りたれ。忘れぬは我わがために、この時嬉しかりし楓にこそ。

その枝のさき近々と窓の前にさしいでたれば、広岡のかの君は二階にのぼりて、此方こなたの欄てすりつかに掴まりたるわが顔を見て微笑ほほえみたまいつつ、腕かひなさしのべて、葉さきをつまみ、撓しないたる枝を引寄せて、折鶴みみずるひいな、木き、籬かきの形に切りたるなど、色ある紙あまた引結いてはソト放したまう。小枝は葉摺はすれしてさらさらと此方に撓うららいて来つ。風少しある時殊に美しきは、金紙きんし、銀紙ぎんしを細く刻みて、蝶の形にしたるなりき。

雨の日はいかにしけむ、今われ覚えておらず。麗うららかなる空をば一ひと群むれの鳩輪はとをつくりて

舞うが、姉上とわれと対むかいあえるに馴なれて、恐おそれげなく、此方こなたの軒、彼方かなたの屋根に颯さつと下おろしては翼を休めて、廂ひさしにも居たり。物干場の棹にも居たり。棟にも居たり。みな表おもて町まちなる大おお通との富有の家に飼われしなりき。夕ゆう越こえくれば一斉ねぐらに帰る。やや人足繁く、戸外おもてを往來ゆきかうが皆あおぎて見つ。楓にはいろいろのもの結ばれたり。

そのまま置ひとよきて一夜を過すに、あくる日はまた姉上の新たに結びたまわでは、昨日きのうなるは大方失うせて見えみえずなりぬ。

手届てとどきて人の奪ううべくもあらねば、町の外れなる酒屋の庫くらと觀み世物小屋の間に住めりと人々の言いあえる、恐おそしき野のぶ衾すまの來きて攫さらえて行ゆくと、われはおさなき心に思おもいき。

野衾

一

その翼広げたる大きさは鳶とびに較たくうべし。野のぶ衾すまと云いうは蝙蝠こうもりの百もも歳とせを經へたるなり。

年紀六十に余れる隣の扇折の翁が少き時は、夜ごとにその姿見たりし由、近き年は一
 年に三たび、三月に一度など、たまたまならでは人の眼に触れずという。一尾ならず、
 ニツ三ツばかりある。普通の小さきものとは違いて、夏の宵、夕月夜、灯す時、黄昏に
 は出来らず。初夜すぎてのちともすればその翼もて人の面を蔽うことあり。柔かに冷き
 風呂敷のごときもの口に蓋するよと見れば、胸の血を吸わるとか。幻のごとく軒に閃き
 て、宮なる鳥居を掠め、そのまま隠れ去る。かの酒屋の庫と、観世物小屋の間まで、わが
 家より半町ばかり隔りし。真中に古井戸一ツありて、雑草の生い茂りたる旧空地なりし
 に、その小屋出来たるは、もの心覚えし後なり。

興行あるごとに打囃す鳴物の音頼母しく、野衾の恐れも薄らぐに、行きて見れば、
 木戸の賑いさえあるを、内はいかにおもしろからむ。母上いませし折は、わが見たしと云
 うを許したまわず、野衾の居て恐しき処なるに、いかでこの可愛きもの近寄らしむべきと
 て留めたまいぬ。

亡き人となりたまいて後は、わが寂しがるを慰めむとや、伯母上は快よく日ごとに出だ
 したまう。場内の光景は見馴れて明に覚えたり。

土間、引船、棧敷などいふべきを、鶉、出鶉、坪、追込など称えたり。舞台も、花道

も芝居のごとくに出来たり。人数一千は入るを得たらむ。

木戸には桜の造花を廂にさして、枝々に、赤きと、白きと、数あまた小提灯に、「て。」「り。」「は。」と一つひとつ染め抜きたるを、夥しく釣して懸け、夕暮には皆灯すなりけり。その下あたり、札をにかけて、一人々々役者の名を筆太にこそ記したれ。小親というあり、重子というあり、小松というあり、秋子というあり、細字もてしのぶというあり。小光、小稻と書きつらねて、別に傍に小六と書いたり。

二

印半纏被たる壮伎の、軒に梯子さして昇りながら、一つずつ提灯に灯ともすが、右の方より始めたれば、小親という名、ぱつと墨色濃く、鮮かに最初の火に照されつ。蠟燭の煮え込まざれば、その他はみな臃気なりき。

ありたけの提灯あかくなりたる後に、一昨日も、その前の日も、昨日も来つ。この夕は時やや早かりければ、しばしわれ木戸の前に歩行くともなくイみつつ、幾度か小親の名を仰ぎ見たり。名を見るさえ他のものとは違いて、そぞろに興ある感起りぬ。かねてその

牛若に扮せし姿、太くわが心にかないたり。

見物は未だ来り集わず。木戸番の燈大通より吹きつくる風に揺れて、肌寒う覚ゆる折しも、三台ばかり俣をならべて、東より颯と乗着けしが、一斉に轆をおろしつ、と見る時、女一人おり立ちたり。続いて一人片足を下せるを、後なる俣より出でたる女、つと来て肩を貸すに手を掛けてひらりと下りたり。先なるは紫の包を持ちて手に捧げつ。左右に二人引添いたる、真中に丈たかきは、あれ誰やらむ、と見やりしわれを、左なる女木戸を入りぎま、偶と目を注ぎて、

「おや、お師匠様。」

また一人、

「あの、このお子ですよ。」と低声に言いたり。聞棄てながら一步を移せし舞の師匠は振り返りつ。訝かなる眼にキトわれを見しが、互に肩を擦合せて小走りに入るよとせしに、つかつかと引返して、冷たき衣の袖もてわが頸を抱くや否や、アと叫ぶ頬をしたたかに吸いぬ。

ややありてわれ眼を睜りたり。三人は早や木戸を入りて見えざりき。あまり不意なれば、茫然として立つたるに、ふと思ひ出でしは野衾の事なりき。俄に恐しくなりて踵を返す。

通の角に、われを見て笑いながらイみたるは、その頃わが家に抱えられたる染という女なり。

走り行きて胸に縫りぬ。

「恐かつたよ、染ちゃん恐かつたよ。」

「そう、恐かつたの、貢さんはあれが恐いのかい。」

「見ていたの。」

「ああ見ていたとも、私が禁厭をしてあげたから何とも無かつたんですわ。危ないとね。」

「恐かつたよ。染ちゃん、顔をね、包んでしまったから呼吸が出なかつたの。そうして酷いの、あの頬ぺたを吸つたんだ。チュツてそう云つたよ、痛いよ、染ちゃん。」

染は眉を擧めて仔細らしく、

「どれ、ちよいとお見せ。」

と言いつつ、「て」「り」「は」の提灯のあかりに向けて透し見るより、

「おや、おや、おや、大変。まあ。」とけたたましく言うに、わが胸轟きたり。おどおどすれば真顔になりて、

「乱暴だ、酷いことをするわ、野衾が吸ったんだね、貢さん、血が出てるわ。……おや。」
驚きて、

「あら、泣くんじゃありません。何ともないよ、直ぐ治るから往来で何のこつたね、あら、泣かないでさ。」

と小腰を屈めて、湯に行きし帰途なれば、手拭の濡れたるにて、その血の痕というものの拭いたり。

「さあ、治りました。もう何ともないよ。」

と賺す、血の出たるが、こう早く癒ゆべしとは、われ信ぜず。

「嫌だ、嫌だ、痛いや、治りやしないや。」

「困るね。」

いう折しもまたここに来かかりしは、むかいなるかの女房なりき。われはまた彼方に縫りぬ。

「小母さん、恐かったよ。あのね、野衾が血を吸ったの。恐かったよ。」

「え、どうしたって云うの、大変だ、あの野衾がね。」
かたわら
傍より、

「姉さんほんとうですよ、あのね。」

と言いつつ、ひたと身を寄せ、染は耳朶みみたぶに嘔ささやきて、

「ね、ほんとうでしょう……ですからさ。」とまた笑えり。

女房は微笑ほほえみながら、

「不可いけないよ。貢さんは何でもほんとうにするから欺だまされるんだよ。この賑にぎやかなのに、何だつてまた野衾のびんなんかが出るものかね。嘘だよ、綺麗な野衾だから結構さ。」

「あら姉さん。」

「お止よしよ。そんなこと謂いつて威おどすのは虫の毒さ、私も懲いりたことが有るんだからね、欺しっこなし。貢さん、なに血なもんかね、御覧よ。」

中指のさきを口に含みて、やがて見せたる、血の色つきたり。

「紅べにさ。野衾でも何でも可いいやね。貢さんを可愛がるんだもの、恐くはないから行つて御覧、折角、気晴きばらしに行くのものを、ねえ。此奴こいつが、」

「あれ。」

「あばよ。」とばかり別れたる、囃子はやしの音おもしろきに、恐しき念も失うせて、忙せわしくまた木戸に行きぬ。

能は始まりたり。早くと思うに、木戸番の男、鼻低う唇厚きが、わが顔を見てニタニタと笑いたれば、何をか思うと、その心はかり兼ねて猶予いぬ。

三

「坊ちゃん、お入んなさい、始めましたよ。」

わが猶予いたるを見て、木戸番は声を懸けぬ。日ごとに行きたれば顔を見識れるなりき。「どうなすつたんだ。さあ、お入んなさい、え、どうしたんだね。もう始めましたぜ。何でさ、木戸銭なんか要りやしません。お入んなさい、無銭で可うごす。木戸銭は要りませんから、菓子でも買っておあがんさい。」

大胡坐搔きたるが笑いながら言示せり。さらぬだに、われを流眊にかけたるが気に懸りて、そのまま帰らむかと思えるならば、堪えず腹立たしきに、伯母上がたましい銀貨入りたる緑色の巾着、手に持ちたるままハタと擲ちたり。銀貨入を誰が惜む。投ぐると齊しく駈け出しぬ。疾く帰りて胸なる不平を伯母上に語らばやと、見も返らざりし背後より、登音忙しく追迫りて、手を捉えて引留めしは年若き先の女なり。

「坊ちゃん、まあ、あなた、まあどう遊ばしたんですよ。どこへいらつしやるのさ。え、何かお気に入らない事があつたんですか。お怒りなすつて、まあ、飛んだ御機嫌が悪いのねえ。堪忍して頂戴な。よう、いらつしやいよ。さあ、私と一所においでなさいましなね。何です、そんな顔をなさるもんじやありません。」

「嫌だ。」

「あれ、そんなこと有おっしや仰らないでさ。あのね、あのね、小親さんがお獅子を舞いますつて、ね、可いいでしよう、さあ、いらつしやい。」

と手を取るに、さりと拒み得で伴われし。木戸かかに懸る時、木戸番の爺おじわれを見つ、北叟ほくそえ笑むようなれば、面おもてを背けて走り入りぬ。

人大方は来揃さしきいたり。棧敷さしきの二ツ三ツ、土間少し空きたる、舞台に近き棧敷の一間に、女はわれを導きぬ。

「坊ちゃん、じゃあね、ここで御覧なさいまし。」

意外なる待もてな遇かな、かかりし事われは有らず。平時いつもはただ人の前、背後うしろ、傍わきなどにて、妨さまたげとならざる限り、処定めず観みたりしなるを。大なる棧敷おおいの真中まんなかに四辺あたりをみまわして、小ちいさき体ひつつ一個ひとつまず突立つたてり。

とばかりありて、仮花道に乱れ敷き、支え懸けたる、見物の男女なんによが袖そで肱ひじの込合うたる中をば、飛び、飛び、小走こばしりに女の童め一人、しのぶと言うなり。緋鹿子ひがのこを合せて両面着けて、黒き天鷲絨びろうどの縁取りたる綿厚わたあてき座蒲団ざぶとんの、胸に当てて膝ひざを蔽おほうまでなるを、両袖に抱えて来つ。

見返むすめる女に顔を見合せて、

「あのね、姉さんが。」と小声に含めて渡す。

受取りむすめて女は棧敷むすめに直しぬ。

「さあ、お敷き遊ばせよ。」

われはまた蒲団に乗りて、坐すわりもやらで立ったりき。女むすめは手もて足を押えて顔を見て打笑みたり。

「さあ、おゆつくり。」

われは据えられぬ。

「しのぶさん、お火鉢。」

「あい。」と云いしがして、土間より立わかもつたる半纏着さしまねの壮わかも伎さしまねを磨さき、

「ちよいと、火鉢をね。」

「おい。」とこちら向く。その土間なる客の中に、国麿の交りしをわれ見たり。顔を見合せ、そ知らぬ顔して、仙冠者は舞台の方に眼を転じぬ。牛若に扮したるは小親にこそ。

四

髪の毛いと黒くて艶かなるを、元結かけて背に長く結びて懸けつ。大口の腰に垂れて、舞う時靡いて見ゆる、また無き風情なり。狩衣の袖もゆらめいたり。長範をば討つて棄て、血刀提げて吻と呼吸つく状する、額には振分たる後毛の先端少し懸れり。眉凜々しく眼の鮮なる、水の流るるごときを、まじろぎもせで、正面に向いたる、天晴快き見得なるかな。

囃子の音止み寂然となりぬ。肅然として身を返して、三の松を過ぎると見えし、くるりと捲いたる揚幕に吸わるるごとき舞込みたり、

「お茶はよろし、お菓子はよしかな、お茶はよろし。」

と幕間を売歩行く、売子の数の多き中に、物語の銀六とて痴けたる親仁交りたり。茶の運びもし、火鉢も持て来、下足の手伝もする事あり。おりおり、小幾、しのぶ、小稲が

演ずる、狂言の中に立交りて、ともすれば屹となりて居直りて足を構え、手拍子打ち、扇を揚げて、演劇の物語の真似するがいと巧なれば、皆おかしがりて、さは渾名して囃せるなり。

真似の上手なるも道理よ、銀六は旧俳優なりき。

かつて大槻内蔵之助の演劇ありし時、渠浅尾を勤めつ。三年あまり前なりけむ、その頃母上居たまいたれば、われ伴われて見に行きぬ。

蛇責こそ恐しかりけり。大釜一個まず舞台に据えたり。背後に六角の太き柱立てて、

釜に入れたる浅尾の咽喉を鎖もて縛めて、真白なる衣着せたり。顔の色は蒼ざめて、乱

髪振りかかれるなかに輝きたる眼の光の凄まじき、瞻り得べきにあらず。夥兵立懸り、

押取巻く、上手に床几を据えて侍控えいて、何やらむい罵りしが、薪をば投入れぬ。

どろどろと鳴物聞えて、四辺暗くなりし、青白きものあり、一条左の方より閃きの

ぼりて、浅尾の頬を掠めて頭上に鎌首を擡げたるは蛇なり。啊呀と見る時、別なるがまた

頸を絡いて左なるとからみ合いぬ。恐しき声をあげて浅尾の呻きしが、輪になり、棹にな

りて、同じほどの蛇幾条ともなく釜の中より蜿蜒り出でつ。細く白き手をきて、その一条

を搔掴み、アと云いさま投げ棄てつ。交る交る取つて投げしが、はずみて、矢のごとく

それたる一条、土間に居たまいたる母上の、袖もてわれを抱きてうつ向きたましい目の前にハタと落ちたるに、フト立ちて帰りましたまいき。

この時その役勤し後、渠はまた再び場に上らざるよし。蛇責の釜に入りしより心地悪くなりて、はじめはただ引籠りしが、俳優になりぬとて罷めたるなり。やや物狂わしくなりしよしなど、伯母上のうわさしたまう。

何地行きけむ。久しくその名聞えざりしが、この一座に交りて、再び市人の眼に留りつ。かの時の倅は、露ばかりも残りおらで、色も蒼からず、天窓兀げたり。大声に笑い調子高にもおいしい、身軽く小屋の中を馳せ廻りて独快げなる、わが眼にもこのおじが、かの恐しき事したりとは見えず。赤き願巻向うざまにしめて、裾を括げ、片肌脱ぎて、手にせる菓子の箱高く捧げたるがその銀六よ。

五

「人気だい、人気だい。や、すてきな人気じゃ。お菓子、おこし、小六さん、小親さん、小六さんの人気おこし、おこしはよしか。お菓子はよしか。」

いまの能の品評しなきだめやする、ごうごうと鳴る客の中を、勢いよく売ありきて、やがてわが居たる棧敷さじきに來りて、

「はい、これを。」

と大きく言いて、紙包にしたる菓子をわが手に渡しつ。

「樂屋から差上げます。や、も、皆大喜び、数ならぬ私わたくしまで、はははは。何てツてこれ坊ちゃんのようなおちいさいのが毎晩見て下さる。当興行大おおあたり当、滅茶々に面白い。すてきに面白い。おもしろ狸のきぬた巻でも、あんころ餅もちでも、鹿子餅かのこでも、何でもございじゃ、はい、何でもござい、人気おこし、お菓子はよしか。小六さん、小親さん、小六さん的人气おこし、おこしはよしか。」と呼びかけて前の棧敷を跨またぎ越ゆる。

ここに居て見物したるは、西洋手品の一ひとむれ群なりし。顔あかく、眼まなこつぶらにて、頤おとがを髯いひげに埋うづめたる男、銀六の衣きものの裾すそむずと取りて、

「何を！」と言いさま、三ツ紋つきたる羽織の片袖まくし揚げつつ、

「何だ、小六さん、小六さんの人気おこしたあ何だ。」

「へい。」

「へいじゃあない、小六さんたあ何だ。客の前を何と心得てるんだ。猥けだものめ、乞食芸人の癖

に様づけに呼ぶ奴があるもんか。汝あ何だい、馬鹿め！」

と言うより早く拳をあげて、その胸のあたりをハタと撲ちぬ。背後に蹠踉けて洗面せしが、たちまち笑顔になりて、

「許させられい、許させられい。」

と身を返して遁げ行きぬ。

この時、人声静まりて、橋がかりを摺り足して、膏葉練ぞ出で来れる。その顔は前にわれを引留めて、ここに伴いたるかの女に肖たるに、ふと背後を見れば、別なるうつくしき女、いつか来て坐りたり。黒髪を束ねて肩に懸けたるのみ、それかと見れば、倅は舞台なりし牛若の凜々しげなるには肖で、いと優しきが、涼しき目もて、振向きたるわが顔をば見し。打微笑みしまま未だものいわざるにソト頬摺す。われは舞台に見向きぬ。

背後見らるる心地もしつ。

ややありて吸競べたる膏葉練の、西なる方吸寄せられて、ぶざまに転けかかりたる状いと可笑きに、われ思わず笑いぬ。

「おもしろうござんすか。」

と肩に手をかけて潜めき問いぬ。

「よく来て下さいますね。ちよいと、あの、これを。」

渠は先にわが投げ棄てし銀貨入を手にしつつ、

「私これ頂いときますよ。ね、頂戴。可うござんすか。」

「ああ。」

また領^{うなす}げば軽く頂き、帯の間に挟みしが、

「木戸のがね、お気に入りませんか。だったら叱ッてもらってあげますから、腹を立てないで毎晩、毎晩、いらつしやいませ、ね。ちゃんとここを取って、私のこのお蒲団敷いてあげますわ。そうしてお前さんの好きなことをして見せましょう。何が可^いいの、狂言がおもしろいの。」

「いいえ。」

「じゃあ、お能の方なの。」

「牛若が可^いんだ、刀持って立派で可^いんだ。」

「そう。」と言いかけて莞爾^{にこり}とせしが、見物は皆舞台を向いたり。人知れずこそ、また一ツ、ここにも野衾居たりしよ。

狂言

一

見物みな立ちたればわれも立ちぬ。小親が与えし緋鹿子の蒲団の上に、広き棧敷の中に、小さき体一ツまたこそこの時突立ちたれ。さていかにせむ。前なるも、後なるも、左も右も、人波打ちつつどやどやと動揺み出づる、土間棧敷に五三人、ここかしこに出後れしが、頭巾被るあり、毛布纏うあり、下駄の包提げたるあり、仕切の板飛び飛びに越えて行く。木戸の方は一団になりて、数百の人声推合えり。われはただ茫然としてせむ術を知らざりき。

「おい、帰らないか。」

と声を掛け、仕切の板に手を支きて、われを呼びたるは国磨なり。釦三ツばかり見ゆるまで、胸を広く搔広げて、袖をも肱まで捲し上げたる、燃立つごとく紅の襯衣着たり。尻さがりに結べる帯、その色この時は紫にて、

「どうした、一所に帰ろうな。」

「後から。」と低く答えぬ。

国麿は不満の色して、

「だって皆^{みんな}帰るじゃあないか。一人ぼっちで何しに残るんだ。」

「だって、まだ、何だもの。」

となお猶^{ためら}予^{むすめ}いぬ。女来て帰れと言わず、座蒲団このままにして、いかで、われ行^ゆかるベ^き。

国麿はものあり顔に、

「可^いいじゃあないか、一所に帰ったって可^いいじゃあないか。」

「だって何だから……どうしたんだなあ。」

ひたすら楽屋の方^{かた}打見やる。国麿は冷^{ひや}かなる笑^{えみ}を含み、

「用があるんか。誰か待つてるか、おい。」

「誰も待つてやしないんだ。」

「嘘を吐^つけ。いまに誰か来るんだろう。云ったって可^いいじゃないか。」

「誰も来るんじゃあないや。そうだけれど……困るなあ。」

「何を困るんだ。え、どうしたんだ。」

「どうもしないさ。」

「じゃあ困る事はないじやあないか。な、一所に帰ろうと云うに。」

顔の色変りたれば恐しくなりぬ。ともかくも成らば成れ、ともに帰らむか。鳥居前のあたりにて、いかなる事せむも計られずと思いて逡巡するに、国麿は早や肩を揚げぬ。

「疾はやくしないかい、おい。」

「だって何だから。」

「何が何だ、おかしいじやあないか。」

「この座蒲団が……」

国麿はいま見着けし顔にて、

「や、すばらしい蒲団だなあ。すばらしいものだな、どうしたんだ。この蒲団はどうしたんだ。」

「敷いてくれたの。」

「誰が、と聞くんだ、敷いてくれたのは分つてらい。」

「お能のね、お能の女。」

「ふむ、あんな奴の敷いたものに乗つかる奴が有るもんか。彼奴等、おい、皆乞食だぜ。踊つてな、謡唄つてな、人に銭よウ貰つてる乞食なんだ。内の父様なんか、能も演るぜ。む、謡も唄わあ。そうして上手なんだ。そうしてそういつてるんだ。ほんとのな、お能というのは男がするもんだ。男の能はほんとうの能だけれど、女のは乞食だ。そんなものが敷いて寄越した蒲団に乗るとな、汚れるぜ。身が汚れらあ。しちりけつぱいだ、退け！」

踏みこたえて、

「何をする。」

「何でえ、おりや士族だぜ。退け！」

二

国麿は擬勢を示して、

「汝平民じゃあないか、平民の癖に、何だ。」

「平民だつて可いや。」

「ふむ、豪勢なことを言わあ。平民も平民、汝の内や芸妓屋じゃあないか。芸妓も乞食も同一だい。だから乞食の蒲団になんか坐るんだ。」

われは恥かしからざりき。娼家の兎よと言わるるごとに、不断は面を背けたれど、こはいわれしこの時のみ、われは恥しと思わざりき。見よ、見よ、一たび舞台に立たむか。小親が軽き身の働、躍れば地に棲を着けず、舞の袖の翻るは、宙に羽衣懸ると見ゆ。長刀かつぎてゆらりと出づれば、手に抗つ敵の有りとも見えず。足拍子踏んで大手を拵げ、颯と退いて、衝と進む、疾きこと電のごとき時あり、見物は喝采しき。軽きこと鷲毛のごとき時あり、見物は喝采しき。重きこと山のごとき時あり、見物は襟を正しき。うつくしきこと神のごとき時あり、見物は恍惚たりき。かくても見てなお乞食と罵る、さは乞食の蒲団に坐して、何等疚しきことあらむ。われは傲然として答えたり。

「可いよ乞食、乞食だから乞食の蒲団に坐るんだ。」

「何でえ。」

国麿は眼を円にしつ。

「何でえ、乞食だな、汝乞食だな、む、乞食がそんな、そんな縮緬の蒲団に坐るもんか。」

「可いよ、可いよ、私あたいはね、こんなうつくしい蒲団あたいに坐る乞食なの。国ちゃん、お菰こも敷こもいてるんじゃないや。うつくしい蒲団あたいに坐る乞食だからね。」

国麿は赤くなりて、

「何よウ言つてんだい。おい貢きさま、汝きさまそんなこと言つて可いのかな、帰途かえりがあるぜ。」

威おどされてわれはその顔を見たり。舞台は暗くなりぬ。人大方は立たち出いでぬ。寒さむき風場じょうに満みちて、釣つり洋燈らんぷ三さんつ四しつ薄暗あかりき明映あかりすに心細こくこそなりけれ。

「帰途かえりがあるつて、帰途かえりがどうしたの、国ちゃん。」

国麿は嘲あざわ笑わらえり。

「知つてるだろう。鳥居前おれの俺おれが関せきを知つてるだろう。」

手下おに四五人、稲葉おに太郎かど荒象園かしこの鬼門おに彼処かどに有ありて威ほを恣しいにす。われは黙もくして俯うつ向きぬ。

国麿はじりりと寄りて、

「皆知みんなつてるぜ、おい、皆見みなていたぜ。汝婦人きさまとばかり仲好あんなくして、先刻さつきもおれを見て知らない顔はなして談話はなししてたじやあないか。そうするが可いや、うむ、たんとそうするさ。」

「国ちゃん、堪忍こらおし。」

「へ、あやまるかい。うむ、あやまるなら可いや。じゃあ可いから、な、その座蒲団あたいにち

よつと己をのツけてくれないか、そこを退いて。さあ、」

国麿はヌト立ちつつ、褌取りからげて、足を、小親がわれに座を設けし緋鹿子に乗せんとす。止むなく、少しく身を退きしが、と見れば足袋を穿きもせで、そこら跣足にてあるく男の、足の裏太く汚れて見ゆ。ここに乗せなばあとつけなむ、土足にこの優しきもの踏ますべきや。

「いけないよ。」

「何だ……」

覚悟したれば身を交して、案のごとく踵をあげたる、彼が足蹴をば外してやりたり。蒲団持ちながら座を立ちたれば、拳の楯に差翳して。

三

「あら。」

国麿の手は弛みぬ。われは摺抜けて傍に寄りぬ。

「いやです、いやです、あなたはいやです。」

緋鹿子の片隅に手を添えて、小親われを庇^{かほ}うて立ちぬ。国麿は目を怒らしたり。その帯は紫なり、その襯衣^{しやくくれなひ}は紅なり。緋鹿子の座蒲団は、われと小親片手ずつ掛けて、右左に立^た護^{ちまも}りぬ。小親この時は楽屋着の裾長^{すそ}く緋縮緬^{ひぢりめん}の下着踏みしだきて、胸高に水色の扱^{しぎ}帯まといたり。髪をばいま引束ねつ。優しき目の裡凜^{うちりん}として、

「もし、旦那様、あの、乞食の蒲団は、いやです、私が貴方^{あなた}にや敷かせないの。私の蒲団です。渡すことはなりません。」

と声いとすずしくいい放てり。

「よく敷かせないで下さいました。お前さん、どこも何ともないかい。酷^{ひど}いよ、乱暴ツちやあない。よくねえ、よく庇^{かほ}つて下すツたのね。楽屋で皆^{みんな}がせりあつて、ようよう私が、あの私のを上げたんですもの。他人^{ひと}に敷かれて堪^{たま}るものかね、お帰りよ、お帰り遊ばせよ。あなた！」

「何でえ、乞食の癖に、失敬な、失敬じゃあないか。お客に向^{むか}つて帰れたあ何だい。」

「おからだの汚^{けがれ}になります。ねえ。」

とわが顔に頬をあてて、瞳は流れるごとく国麿を流眄^{しりめ}に掛く。国麿は眉を動かし、

「馬鹿、年増^{としま}の癖に、ふむ、赤ン坊に惚^ほれやがったい。」

「え、」

と顔を赧あからめしが、

「何ですねえ、存じません。何の、鼻ひい尻きになすつて下さるお客様を大事にしたつて、何が、何が、おかしゆうござんすえ。」

「おかしいや、そんな小ちツぽけなお客様があるもんか。」

「あら、私わばかりじゃありません。姉あねさんだつて、そういういました。そりや御ご鼻び尻しになすつて下さるお客様も多いけれど、何の気なしにただおもしろがつて見て下さるのはこのお児こばかり。あなた御ご存ぞんじないんでしょう。当こ座ざではじめてから毎まい晩ばん、毎まい晩ばん来て下すつて、あの可愛こらしい顔かほをして傍わ見みもしないで見ていて下さるじゃありませんか。このお年とし紀きで、お一人で、行い儀ぎよく終しま番ぱんまで御ご覧らんなすつて、欠あ伸くび一いっツ遊あそばささない。

手て品ひんじやアありません、独こ楽ま廻まわしじや有りません。球たま乗のりでも、猿やま芝がら居がらでも、山やま雀がらの芸げいでもないの。狂きやう言げんなの、お能ねなの、謡うたをうたうの、母お様かさんに連つれられて、お乳ちちをあがつていらつしやる方かたよりほか、こんな罪つみのない小こ児ども衆しゆうのお客きやく様さまがもう一人ひとりござんすか。

目めにつきました、目め立たちました。他ほかのお客きやく様さまにはどうであろうと、この坊ぼくちゃんだけにや飽あかしたくない。退たい屈くつをさしたくない、三十日さんじゅうにちなり、四十日しじゅうにちなり、打うち通とほすあいだ来て

いただきたい、おもしろう見せてあげたいと、そう思ったがどうしました。……

ほんとうに芸人冥利、こういう御贔屓を大事にするは当前でござんせんか。しのぶも、小稲も、小幾も、重子も、みんな弟子分だから控えさして、姉さんのをと思つたけれど、私の方が少いからお相手に似合うといふので、私の座蒲団をあげたんですわ。何も年増だの、何のつて、貴方に、そ、そんなことを言われる覚えはない！」

と太く気色ばみ言い開きし。声高なりしを怪みけむ。小稲、小幾、重子など、狂言囃子の女ども、楽屋口より出で来りて、はらりと舞台に立ちならべる、大方あかり消したれば、手に手に白と赤との小提灯、「て」「り」「は」と書けるを提げたり。

四

舞台なりし装束を脱替えたるあり、まだなるあり、烏帽子直垂着けたるもの、太郎冠者あり、大名あり、長上下を着たるもの、髪結いたるあり、垂れたるあり、十八九を頭にて七歳ばかりのしのぶまで、七八人ぞ立ならべる。

「どうしたの、どうしたの。」

と赤き小提灯さしかざし、浮足してソト近寄りたる。国麿の傍に、しのぶの何心なく来かかりしが、

「あれ。」

恐しき顔して睨めつけながら、鼻の前にフフと笑いて、

「何か言つてらい、おたふくめ。」

と言棄てに身を返すとて、国麿は太き声して、

「貢！」

「牛若だねえ。」

とて小親、両袖をもてわが背蔽いぬ。

「覚えておれ、鳥居前は安宅の関だ。」

と肩を揺りて嘲笑える、渠は少しく背屈みながら、紅の襦衣の袖二ツ、むらさきの帯に突挿しつつ、腰を振りてのさりと去りぬ。

「済まなかつたね、みつぎさん、お前さん、貢さんて言うの？」

「ああ。」

「楽屋に少し取込みが有つたものだから、一人にしておいて飛んだめに逢わせたこと。気

が着いて、悪いことをしたと思つて、急いで来て見るとああだもの。よくねえ、そして、あの方はお友達？」

「友達になれツていうのよ。」

「おや、そう。しない方が可いいよ。可いや厭な人つちやあない。それでもよく蒲団を敷かせないで下すツた。それは私や嬉しいけれど、もしお前きずさん疵でも着けられちや大變だのに、どうして、なぜ敷かせてやらなかつたの。」

「だツて、あんな汚い足をつけられると、この蒲団が可かわい哀いそうだもの。きれいだね、きれいな座蒲団、可かわい愛いんだねえ。」

真まんなか中なかを絞しぼりて、胸むねに抱いだき、斜ななめに頬ほを押お当あつるを、小親こぢい見て、慌あわしく、

「あら、そんな事をなすツちや、お前まへさんの顔かほに。まあ、勿な体たない。」

とて白たなきそこ掌てのひらもて拭ぬぐう真ま似ねせり。

「あのほんとに、毎晩いらつしやいよ。私もついあんな事を云つたんだから、あの人につけても、お前まへさんが毎晩来てくれなくツちや極きまりが悪いわ。後生ごせいですよ。その代り、この蒲団は、誰の手も触ふらせないでこうやつて、」

二隅ふたすみを折ひりて襟えりをば搔かい、胸むねのあたりいと白くきにその紅べにを推お入いれながら、

「ごうやって、お守まもりにしておくの。そうしちや暖あつためておいて、いらつしやる時敷かせますからね、きつとよ。」

「ああ。」

「ほんとうかい。」

「きつと!」

「嬉しいねえ。」と莞爾にこりとして、

「じゃあね、晩おそくなりましたから今夜はお帰んなさいな。母おつかさん様がお案じだろうから。」

母はあらず。

「母様じゃあないの。伯母さんなの。」

「おや、母様ないの。」

「亡くなったの、またいらつしやるんだツて、皆みんなそう云うけれど、嘘なの。もうお帰りじやない、亡くなってしまったんだ。」

「まあ。」と言いかけてまた瞻みまもりしが、領うなずく状さまにて、

「じゃあその伯母さんがお案じだろうから、私が送って行ってあげましょう、ね。鳥居前ツて言うのはどこ? 待まち伏ふせをしてると不可いけないから。」

「直、そこだよ。」

五

「わけ無しだね。ちよいと衣物きものを着替えて来るから待つていらっしやいよ。小稲さん、遊ばしてあげておくれ。」

「はい。」

ばらばらと女ども五六人、二人を中に取巻きたり。小稲と云うがまず笑いて、

「若お師匠様、おめでとう存じます、おほほほほほ。」

小親は素知らぬ顔したり。重子というが寄添いつつ、

「ちよいと、何がおめでたいのさ。」

「おや、迂うっかり濶ひろだねえ。知らないのかい。」

「はあ、何ですか。」

「何ですか存じませんが、小稲さんのいいますとおり、若お師匠様、おめでとうございませす。」

傍かたわらより小幾がいう。小松がまた引取りて、

「私もお祝い申しますわ。」

「それでは私も。あの、若お師匠様おめでどう存じます。」

小親は取とり巻まれてうろうろしながら、

「お前達は何をいうのだ。」

「何でも、おめでたいに違いますもの。」

「姉さん、何なの、どうしたの。」

と差出でて、しのぶの問いければ、小稲は静しずに領かうなずきて、

「お前は嬰ねんねえ児ねえだから解わかるまいね、知らない道理わけだから言いって聞きかせよう、あのね、若お

師匠様ししやうさまにね、御亭主おんていぬしが出来たの。」

大勢、

「おやおやおやおや。」

小親は顔あかを赧からめたり。

「知らないよ！」

小稲ちちかかまた立た懸かり、

「お秘かくし遊ばしても不可いけません。そうして若お師匠様、あなたもうお児こ様さまが出来ましたではございませんか。」

「へい。」

「何を言うのだね。」

「争われませんものね。もうおなかが大きくおなり遊ばしたよ。」

「む、これかえ。」と俯うつむ向きて、胸を見て、小親は艶あでやか麗かに微笑えみを含みぬ。

一同目を着け、

「ほんにね。おやおや!」

「だから、お芽出たかろうではないの。」

「そして旦那様はどなたでございます。」

「馬鹿だねえ、嘘だよ。」

「それでは何でございます、どうしてそんなにおなり遊ばしたの。」

「何でもないのさ、知らないツて言うのに。」

「いえ、御存じないでは済みません。あなた私たちにお隠し遊ばしては水臭いじゃありませんか。是非どうぞ、どなたでございますか聞かして下さいませ。」

「若お師匠様、どうぞ私にも。」

「私にも。」

「うるさいね、いまちよいと出懸けるんだから。」

「いえ、お身持で夜あるきを遊ばすのはお毒でございます。それはお出し申されません。ねえ？」

「お身体からだに障りましては大変ですとも。どうして、どうして、お出し申すことではございませんですよ。」

「うるさいよ。詰つまらない。」

「じゃあお見せ遊ばせ、ちよいとそのお腹なかン処ところを、お見せ遊ばせ。」

「そうはゆかない、ほほほほ。」

「撥くすぐりますよ!」

「そうはゆかない、あれ!」

と言うより身震みふるせしが、俯伏うつむけにゆらめく挿頭かんざし、真白ましろき頸うなじ、手と手の間を抜けつ、潜りつ、前髪くまばらりとこぼれたるが仰のけざまに倒れかかれる、裳蹴もすそ返し踵かかとを空あかに、下着くれないの紅宙くれないを飛びて、技利わざぎのことなれば、二間けんばかり隔りたる舞台にひらりと飛び上りつ。す

らりと立つて向直り、胸少し搔^かあけて、緋鹿子の座蒲団の片端見せて指さしたり。

「稲ちゃん、このことかい。」

「は。」と小稲は前に出でて、

「もうお幾月ぐらい？」

「さようさ、九ツ十……」とばかり、小親われを見てまた微笑^{ほほえ}みぬ。

六

「さあ、こん度は坊ちゃんの番だよ。」

とて、小稲つツと差寄りつつ、

「坊ちゃん、お相手をいたしましょうね。何をして遊びましょう。」

われは黙して言わざりき。

「おや、私ではお気に入らないそうだよ。重子さん、ちよいとお前伺つて御覧。」

「はい。」と進み、「さあお相手。」と言う。

「そんな藪^{やぶ}から棒な挨拶^{あいさつ}がありますか！」

「おや！ おや！」と退いたるあと、小松なるべし立替れり。

「私では不可いけませんか。」

「遊ばなくツてもいい。」

「まあ、素そっけ気なくツていらつしやる。」

小稲は笑いぬ。

「坊ちゃん、私にね、そつと内証でおつしやいな、小親さんが、あの、坊ちゃんに何かい
つたでしょう。」

「言わない。」

「うまくおつしやるのよ、可愛い坊ちゃんだツて、そういつたでしょう。」

「ああ、言つた。」

皆どつと笑いたり。

「驚きましたね、そして何でしょう。あの、外の女と遊ぶ事はなりません、そう言やあ
しませんか。」

さることは聞かざりき。

「そんなこと、言やあしないや。」

「あら、お隠し遊ばすと撥りますよ。」

「ほんとう、そんなこと聞きやしない。」

「それじゃ堪忍してあげますから、今度は秘さないで有仰いよ。あのね、坊ちゃんは毎晩いらつしやいますが、何が第一お気に入ったの。」

「牛若が可いんだ。そしてお獅子も可いんだ。」

「じゃあ小親さんが可いんですね。うつくしいからお気に入ったんでしよう。え、坊ちゃん。」

「立派で可いんだ。刀さげて、立派で可いんだ。」

「うそをおつしやい。綺麗だから可いんですわ。」

「いいえ。」

「だって、それではお能の装束しないている時はお気にや入りませんか。今なんざ、あんな、しだらな装をしていたじやありませんか。」

われは考えぬ。いかに答えて可からむ。言い損わば笑わるべし。

「やっぱり可いんでしよう。ね、それ御覧なさい。美女だからだよ。坊ちゃんは小親さんに惚れたのね。」

皆どつ哄と笑う。

「惚れやしない、惚れるもんか。」

「だつてお氣に入つたんでしよう。佳いい人だと思ふんでしよう。」

「ああ。」

また声をあげて笑いしが、

「じゃあ惚れたもおんなじだわ。」

「あらあら、惚れたの、おかしいなあ。」

しのぶ手を拍たたきて遁にげながら言う。

哄どつと笑いて、左右より立たち懸かり、小稲と重子と手と手を組みつつ、下より掬すくいて、足を

からみて、われをば宙に昇かいて乗せつ。手の空いたるが後あと前に、「て」「り」「は」の

提灯ふりかざし、仮花道より練ねり出い出して、

（お手々の手車に誰だれ様乗せた。）

（若いお師匠様せんの媚むこ様乗せた。）

（二階さしき棧敷の坊ちゃん乗せた。）

と口々に唄いつれて舞台を横ぎり、花道にさしかかる。ものうければ下おろせとて、上にて

あせるを許さばこそ。小稲はわが顔を仰向き見て、

「坊ちゃんも何ぞお唄いなさい。そうすると下してあげます。」

止むやなく声あげてうたいたり。

(一夜源の助がまけたに借りた、)

(負けたかりたはいくらほど借りた。)

(金子かねが三両に小袖が七ツ、)

(七ツ七ツは十四じやあないか。……)

しのぶは声を合せてうたいぬ。

(下谷したや一番伊達者だてしやでござる。)

(五両で帯を買くうて三両で縮くけて、)

(縮目くけめ々々に七房さげて。)

木戸の外には小親ハヤわれを待ちて、月を仰たぎてたみたり。

夜の辻

一

頭巾着て肩掛シヨオル引絡ひきまとえる小親が立姿、月下ななめに斜なり。横向きて目迎えたれば衝つと寄りぬ。立並べば手を取りて、

「寒いこと、ここへ。」

とて、左の袖下搔かいひら開きて、右手めてを添えて引入れし、肩掛シヨオルのひだしとしと重たくわが肩かかに懸りたり。冷たき帯よ。その肩のあたりに熱したる頬なを撫でて、時計の鎖輝きぬ。

「向うなの、貢さんの家は。」

衣ぎぬすれの音立てて、手をあげてぞ指さし問いたる。霞ヶ峰の半腹に薄き煙めぐりたり。

頂ひともとの松一本、濃く黒き影あざやかに、左に傾きて枝垂しだれたり。頂はの元はげたるあたり、土の色も白く見ゆ。雑木ある処だんだんに隈くまをなして、山の腰遠く瓦屋根かわらやねの上にて隠れ、
一二町越えて、流ながれの音もす。

東より西こなたの此方に、二ならび両側の家軒暗く、小さき月に霜凍いてて、冷たき銀敷しろがねき詰めたらむ、踏心地堅く、細く長きこの小路よこぎの中を横截よこぎりて、廂ひさしより軒にわたりたる、わが青あ

おかえで
楓 眼前にあり。

「あそこ、あの樹のある内。」

「近いのね。」

と歩を移す、駒下駄の音まず高く堅き音して、石に響きて辻に鳴りぬ。

「大分おそ晚くなつたね、伯母さんがさぞお案じだろうに、悪いことをしたよ。貢さん、直送じきつてあげれば可よかつたのに、早いと人だかりがして煩うるさいので、つい。」

「いいえ、案じてやしないよ。遊びに出ていると伯母さんは喜ぶよ。」

「どうして？ まあ。」

小親は身を屈かがめてわが耳を覗のぞいて聞く。

「皆みんなで、余所よその叔父さんと、兄さんと、染ちゃんど、皆でね、お酒を飲んでそうして遊んでいるの、賑にぎやかだよ。私あたばかり寂しいの、一所に遊びたいんだけど、お寝、お寝ねつて言うもの。」

小親はまた歩あ行きかけつつ、

「それはね、貢さんが睡ねむがるせいでしょう。」

「そうじゃあなくつて、私床あたいン中に入いつてからね、母おつか様が居いなくつて寂さしくつて寝ねら

れないんだ。伯母さんも、染ちゃんも、余所の人も皆おもしろそうだよ。賑かなの。私一人寂しいんだ。」

「そうかい。」

「鼠が出て騒ぐよ。がたがたッて、……怖いよ。」

「まあ。」

「恐かったよ、それでね、私、貰つといたお菓子だの、お煎餅だの、ソツと袂たもと中へしまつとくの、そしてね、紙の上へ乗せて枕まくらもと頭へ置いとくの。そして鼠にね、お前、私を苛めるんじゃないやありません。お菓子を遣やるからね、おとなしくして食べるんだッて、そう云ったよ。」

「利口だねえ。」

「そうするとね、床とこ中で聞いて、ソツと考えているとね、コトコトッてつちや喰べるよ。そうしてちつとも恐くなくなつたの。毎晩やるんだ。いつでも来ちやあ食べて行くよ。もう恐くはなくッて、可愛らしいよ。寝るとね、鼠が来ないか来ないかと思つて目を塞ふさいじやあ待つてるの。そうすると寝てしまうの。目を覚すとね、皆食みんなべて行つてあつたよ。」

われは小親の名呼ばむとせしが猶ためら予いぬ。何とか言うべき。

「ねえ。」

「あいよ。」

「ねえ、鼠は可愛いんだねえ。」

「じゃあ貢さん家に猫は居ないのかい。」

「居るよ、三毛猫なの。この間ね、四ツ児を産んだよ、伯母さんが可愛がるよ。」

「貢さんも可愛がつておくれかい。」

われは肩掛シヨオルの中に口籠くちごもりぬ。袖面おもてを蔽おおいたれば、搔かきわ分けて顔をば出いしつ。冷たき夜なりき。

二

小親の下駄の音ふと止やみて、取り合いたる掌てに力籠こもりしが、後うしろざまに退りたり。鳥居の影よこたの横よこたうあたり、人一人立たつたるが、動き出でづるを、それ、と胸轟とどろく。果すきせるかな。蝨いなごの飛ぶよ、と光を放ちて、小路の月に閃ひらめきたる槍やりの穂先霜を浴びて、柄長く一文字に横よこたえつ、

「来い！」とばかりに呼わりたる、国麿は、危きもの手にしたり。

「何だ、それは何だい。」

われは此方に居て声かけぬ。国麿は路の中央に突立ちながら、

「宝蔵院の管槍よ！」

小親は前に出でむとせず、固く立ちて瞻りぬ。

「出て来い、出て来い！ 出て来い！」

といと誇顔にほざいたり。小親わが手を放たむとせず。

「出て来い。男なら出て来い。意気地なし、女郎の懐に挟ってら。」

われは振放たんとす。小親は声低く力を籠めて、

「いけない、危いから。」

「可いんだ。」

「可いじゃありません。お止し、危ないわね。あんながむしやらの向うさき見ずは、どんな事をしようも知れない。怪我をさしちやあ、大変だから……あれさ！」

「構うもんか、厭だ！ 厭だ。」

「厭だつて、危いもの。返りましよう。あとへ返りましよう。大人でないから怖いよ。」

国麿は快げに、

「ざまあ見ろ、女の懐を知られやしまい、牛若も何もあるもんか。」

「厭だ、厭だ、女と一所にや厭だ。放して、放してい。」

「堪忍おし、堪忍おし、堪忍して頂戴、私が悪いんだから堪忍おしよ。」

ひしと抱いだきて引留むる。国麿は背ゆるぎさして、

「勝つたぞ、ふむ、己おれが勝つた。貢きんま、汝が負けた。可いか、能のな、能の女は己がのだけ

。

言棄てて槍を繰り込み、流しりめ晒めに掛かけながら行ゆかむとす。

「負けない、負けやしないや。」

国麿は振返り、

「それじゃあ来るか。」

「恐かあないや。」

「む、来るなら来い！ 女郎の懐から出て来て見ろ。」

小親あなや啊やと叫こびしを聞き棄てに、振放ちて、つかつかとぞ立出でたる。背うしろ後の女ひとはいか

にすらむ、前には槍しじを扱しいたり。

「さあ、来い。」

と目の前に穂尖危なし。顔を背け、身を反し、袖を翳して、

「牛若だ、牛若だ、牛若だ。」

「安宅の関だい。」

「何するもんか、突かれるもんか。」

「突くよ、突くよ。芸妓屋の乞食なんか突ついで勿ね飛ばさあ。」

し兼ねまじき氣勢なれば、気はあせれども逡巡いぬ。小親背後に見てあらむと、われは心に恥じたりき。

「ざまあ見ろ、汝先刻は威張ったけれど、ふ、大きな口よウたたくなあ、蒲団に坐つてる時ばかりだ。うつくしい蒲団に坐つてる乞食やそんなものか。詰らないもんだなあ。乞食、弱虫、背後に立つてるなあどいつだ。やっぱり乞食か、ええ、意気地が無いな。」

するりと槍を取直し、肩に立懸け杖つきつつ、前に屈みて、突出せる胸の紅の襯衣花やかに、右手に押広げて拍いたり。

「口惜くばドンと来い！」

驚破すわ、この時、われは目を瞑りねむて、まっしぐらにその手元に衝入つきいりしが、膝を敷いて茫然むげんたりき。

「あれ！」

「危い。」

と国麿の叫びつつ、しばし呆れたる状さましてイみしが、見上ぐるわれと面おもてを合し、じつと互うちに打うちまもりぬ。

「恐おそしい奴やつだなあ。」

国麿は太い呼吸いきを吻ほとつきて、

「汝きさまの方が乱暴らんぼうだ。よつぽど乱暴だ、無鉄砲極たがまらあ、ああ。」

とまた息吐いききつつ、落胆がっかりしたる顔色かおつきして、ゆるやかに踞つくばいたり。

「え、おい、胸でも突つかれたら、おい貢ごん、どうするつもりだ。気が短いや、うったぜ。乱暴らんぼうな。どこだ、どこだ、むむ。」

「痛いたかあない、痛いたかあない。」

「む、泣くな、泣いちやあ不可んぜ。ああ、何、袂たもとツ草くさを着けときやあわけなしだ。」
と槍を落して、八やつくち口より袂たもとの底を探らむとす。暖かき袖口もて頬かすりきずの掠かすりきず疵きゆう押えたりし小親声を掛けて、

「厭いやですよ、そんな袂たもとツ草なんて汚いもの、不可いけません。酷ひどいことね。もう、灸きゆうのあとさえない児こに、酷ひどいっちゃあない。御覧なさい、こんなになったじやありませんか。あら、あら、血が出て、どうしよう。」

国麿は仰ぎ見て、

「疵は深いかな。酷ひどいかな。」

その太き眉ししかを顰しかめたり。小親は月の影すかに透すかしながら、

「そんなじやあないんだけれど、掠かすったんでしようけれど。」

「じゃあ、何、袂たもとツ草で治ちツちまあ。」

再びその袂たもとの中探らむとす。

「厭いや、そんな、そんなものを、この顔くつつに附くつつ着けて可いいもんですか。」

国麿は苦笑して、

「それじゃあそちらで可いいようにするさ。ああ、驚おどいた。」

力なげに槍を拾うて立ちしが、

「貢、もう己おらあ邪魔あしない。堪忍してやらあ、案じるな。」

と、くるりと此方こなたに背向けつつ、行懸ゆきかけしが立ち返りて、円つぶらなる目に懸念の色あり。またむこう向むきに身を返して、

「袂ちしめ草が血留になるんだ。袂ちしめ草が血留にならあ。」

聞かすともなく呟つぶやきつつ、鳥居の傍わきなる人の家の、雪垣に隠れしが、二の鳥居の有るあたり、広き境内の月の中に、その姿露あらわれて、長く、長く影を引き、槍重たげに荷にないたる、平たき肩を窄すぼめながら向う屈かがみに背を円かまくし、いと寒げなる状見さまえつつ、黒き影法師小さくなりて、突つきあたり遥はるかなる、門高き構かまえの内に薄霧籠こめて見えずなりぬ。われはうかうかと見送りしが、この時その人憎からざりき。

「ちよいと、痛むかい。痛むだろうね、可哀かわいそう相さうに。」

「何ともない。痛かあない。」

「大した事もないけれど、私やもうハツと思った。あの児をつかまえて喧嘩けんかもならず、お前さんがまた肯きかないんだもの、はらはらと思ってる内、もう、どうしたら可いだろう。折角送せきかくつて来ながら申訳がないね。」

「可いよ、痛かあないもの。」

「だつて疵きずがつきました。かすり疵でも、あら、こんなに血が出るものと押拭おしぬぐい、またおしぬぐう。」

「もう可い。」

「可よかありませんよ、このまんまにして、帰しちやあ、私が貢さんのお内へ濟まないもの。」

伯母上何をか曰のたまわむ。

四

「じゃあこうしようね、一所に私の家うちへ来て今夜お泊りでないか。そうして、翌日あすになったら一所に行つて言訳をしましょうよ。私でも、それでなきや誰か若い衆しゅでも着けてあげてね、そして伯母さんにお託わびをしたら可いでしょう。」

「可いよ、そんなにしなくツても、一人で帰るよ。」

「だつて……困ること。」

「何ともないじゃあないか。」

前さきになりて駈かけ出いだせば、後せより忙わしく追おい継すがりて、

「そんなら、まあ可かいとして門かどまで送りましよう。だがねえ、可よかつたらそうおしな。お嫌きら！」

「嫌きらじゃあないけれど、だって、あの、待つてるから。」

「そう、伯母おばさんがさぞ、どんなにかね。」

「いいえ、伯母おばさんじゃあない、姉あねさんなの。」

「おや、貢みつさん、姉あねさんがいらつしやるのかい。」

「宅うちにじゃあないの。むかいのね、広岡ひろおかの姉あねさんなの。」

「広岡ひろおかツて？」

「継母お继母の内うちなの。継母お继母が居いてね、姉あねさんが可あ哀は相あだよ、」

「こう言いいたる時とき、われは思おもわず小親お小親の顔かほ見みられにき。」

「あのウ、」

「何。」

「何なにてそういおうなあ、何なにて言ういうの。あの、お能おのうの姉あねさん？」

「嫌ですね、お能の姉さんツて、おかしいね、嫌だよ。」

「じゃあ何ていうの。え、どういうの。」

頭巾の裡うちに笑えみを籠めて、

「私はね、……親ちか。」

「親ちゃん！」

「あい。おほほ。」

「親ちゃん、継母じゃあないの。え、継母は居ないのかい。」

憂慮きつかわしければぞ問いたる。小親は事も無げに、

「私には何にもないよ。ただね、親方が有るの。」

「そう、じゃあ可いや、継母だと不可いけないよ。酷ひどいよ。広岡の姉さんは泣いている……」

先よりさまで心にも止めざるようなりし小親は、この時身に沁しみて聞きたる状さまなり。

「それは気の毒みななだね。皆みなそうだよ、継母は情なさけないもんだとね。貢さんなんぞ、まだまあ、

伯母さんだから結構だよ。何でも言うことを肯きいて可愛きがられるようになさいよ。おお、

そういやあほんとうに晩おそくなって叱おそられやしないかね。」

「もう来たんだ。ちよいと。」

手を放すより、二三間駈出して、われはまず青楓の扇の地紙開きたるよう、月を蔽いて
 広がりたる枝の下にイみつ。仰げば白きもの仄見ゆる、前の日雨ふりし前なりけむ、姉上
 の結びたましい折鶴のなごりなり。

打見るさえいと懐しく、退りて二階なる窓の戸に向いて、

「姉さん、唯今帰りました。」

と高く呼びぬ。毎夜狂言見に行きたる帰には、ここに来てかくは云うなりけり。案じて
 それまでは寝ねたまわず。

しばし音なければ、彼方に立てる小親の方を視返りたり。

頭巾深々と被れるが、駒下駄のさきもて、地の上叩いて、せわしく低き音刻みながら、
 手をあげて打ち招く。来よ、もの言わむとする状なり。心に懸りて行かむとする時、静に
 雨戸の戸一枚ソトその半ばを引きたまいつ。

楓の上に明さして、小灯の影ここまでは届かず月の光に消えたり。と見る時、立姿あ
 らわしたまいしが、寝みだれていたまいき。

横顔のいと白きに、髪のかかりたるが、冷き風に揺ぐ、欄干に胸少しのりかけたまいぬ。
 「お帰ですか。」

「唯今。」

「遅かったから姉さんは先へ寝ていたがね。」

言いかけて四辺あたりを見まわしたまいし。小親の姿ちらりと動き、ものの蔭にぞなりたる。ふツと灯あかりを吹消したまい、

「お待ちなさいよ。」

五

小親かたわが方に歩み寄りしが、また戻りぬ。内よりくるる枢外すゑす音して、門かどの戸あの開いたるは、
登あしおと音もせざりしが、姉上の早や二階を下りて来たまいたるなり。

「……寒いこと。」

羽織の両袖打合せて、静しずかに敷居を越えたまいぬ。

「晩おそかつたのね。」

「あのね、面白かつたんだよ。」と言いたるが、小さき胸のうち安からず。目には小親の姿見ゆ。

「それは、好^ようございましたけれど、風邪をひくと不可^いけません。あんまり晩^いくならないうちに、今度からお帰^いりなさいよ。」

「はい。」

姉上はなお氣遣^いわしげに、

「そして、まだ内へはお入りでないのでしょうかね。」

「まだ。」

しばらく考えたまいしが、

「それではね、私^{わたし}がここに見^みていますからね、貢^{つとむ}さん、潜^{そっ}と行^いって、あの、格子^{こうし}まで行^いって、見て来て御覽^{ごらん}。」

深^{ふか}き思^{おも}いに沈^{しず}みつつのたまうよう見^みえたれば、いぶかしさに堪^たえざりし。

「どうしたの、私^{あた}の内^{うち}はどうしたの。」

「いえどうもしませんけれど、少し何^{なに}んですから、まあ、潜^{そっ}と行^いって見^みていらっしやい。」

果^はは怖^{こわ}氣^げ立^たちて、

「嫌^{きら}だ、恐^{こわ}いもの。」

「ちつとも恐^{こわ}いことはない。私^{わたし}がここに見^みていますよ。」

われは立放れて拔足しつつ、小路の中を横ぎりたり。見返れば姉上の立ちたまう。また見れば、小親居処いとこらを替えしがなお立てり。

密ひそかにわが家の門かどの戸に立寄りぬ。何事もあらず、内はいと静しずかなり。かかる時ぞ。いつもわが独寝ひとりねの臥床寂ふしどしく、愛らしき、小さき獸うまに甘きもの与えて、寝ながらその食くらうを待つに、一室ひとまの内より、「丹あおよ、」「すがわらよ。」など伯母上、余所よその客など声々に云うが襖漏ふすまれて聞ゆる時なり。今宵こよひもまたしかならむ、と戸に耳を附けて聞くに、ただ寂然ひっそとしたれば、可よし、また拔足して二足三足ぞ退のきたる。

ど、ど、どツという響ひびき、奥の方騒かたがしく、あれと言う声、叫ぶ声、魂消たまぎる声のたちまち起りて、俄にわかにフツと止やみたるが、一文字に門かど口より鞠まりのごとく躍り出で、白きもの空くうを駈かけて、むかいなる屋根に上るとて、凄すさまじき音させしは、家に飼いたる猫なりき。

とばかりありて、身を横さまに、格子戸にハタとあたりて、呻うめきつつ、片足踏出あせでてる染をば、追ひい来し者ありて引ひつらえ、恐おそしき声にて叱りたるが、引摺ひきずりて内に入りぬ。咄嗟とつさの間に、われ警官の姿を見たり。慌ひてて引返ひつかえす、小路のなかばに、小親走り来て手を取りつ。手を取られしままに、姉上の立ちたまえる広岡の戸口ゆに行きぬ。

三人かくは立たちならびしが、未いまだものいわむとする心も出でず。呆あれて茫然そなたと其方を見た

る、楓の枝ゆらゆらと動きて、大男の姿あり。やがてはたと地に落ちて、土蜘蛛の縮むごとく、円くなりて踞りしが、またたく間に立つよとせし、矢のごとく駈け出して、曲り角にて見えずなりぬ。

頭巾をば搔取りたる、小親の目のふち紅かりき。

「貴女。」

声かくるに、心着きたまいけむ。はじめて顔を見合せたまいしが、姉上は、いともの静かに、

「はい。」

とばかり答えたまう、この時格子の戸颯と開きぬ。すかし見る框の上に、片肌脱ぎて立ちたるは、よりより今はわが伯母上とも行交いたる、金魚養う女房なり。渠は片肌脱ぎたるまま、縄もて後手に縛められつ。門に出でし時、いま一人の警官後より出でて、毛布もてその肌蔽いたり。続きて染の顔見ゆ。あとなるは伯母上なりき。

仮小屋

一

樂屋なる居室いまの小窓と、垣ひとえ一重隔てたる、広岡の庭の隅、塵塚ちりづかの傍かたわらに横よこわりて、丈三尺余、周圍まわりおよそ二尺は有らむ、朽目くちめ赤く欠け欠けて、黒ずめる材木の、その本末もとすえには、小さき白き苔こけ、幾百ともなく群むらり生おいたり。

指ゆびさして、それを、旧もとのわが家なる木戸の際みちに、路おほを蔽おほいて繁はてりたりしかの青楓はての果はてなりと、継母の語りし時、われは思わず涙ぐみぬ。

「この変りました事と云つたら、まるで夢のようで、私わしでさえ門かどへ出ては、時々ぼんやりして見る事がございますよ。ほんに貢さんなんぞ、久しぶりでお帰かえんなすつたが、ちつとも故郷らしい処はありますまい。」と継母は庭に立ちてぞ語れる。

しかり、町の中にも、隣より高かりし、わが二階家の、今は平家に建直りて、煙草屋の店開たひらかれたり。扇あふぎ折おりの住みし家は空しくなり、角より押廻おしまわせる富家の持地もちじとなりて、黒き板塀いたへ建て廻まわされぬ。

そのあたりの家はみな新木造あらきつづくりとなりたり。小路は家を切開きりきて、山の手の通りに通ず

るようなしたれば、人ひと通とおいと繁しげく、車馬しやばの往来しきり頻しきりなり。

ここに居ゐて遊あそぶ小児こども等ら、わが知りたるは絶たえてあらず。風俗かざもまた異かりて見みゆ。わが遊あそびし頃は、うつくしく天窓あたまそりたるか、さらぬは切きり禿かむろにして皆みな梳すいたるに、今は尽ことごとく皆みな毬いがり栗りに短はく剪はみたり。しらくも頭この児こ一人目ひとめに着きぬ。

すべてうつくしき女おんなあらずなりて、むくつけなる男おとこぞ多おほき。三尺さんせき帯おび前まへにメ《し》めて、印いん半纏はんてん着きたるものなんど、おさなき時には見みもせざりし。

町まちもこうは狭せまからざりしが、今はただ一ひと跨またぎ二足ふたあし三足さんあしばかりにて、向むかひの雨あま落おちより、此方こなたの溝みぞまで互あひるを得えるなり。

筋すぢ向むかひなりとわれは覚しゆ。かの石いしの鳥居とりゑまで、わが家いへより赴むかふには、路みちのほどいと遙はるなりと思おもひしに、何事なにことぞ、ただ鼻はなの先さきなる。宮みやの境内みやうちも実まことに広ひろからず、引ひ抱かかえて押お動かかせし百日ひゃくじつ紅こうも、肩かたより少し上うへぞ梢こずえなる。仰あがいで高たかし厳いかめと見みし国麿くにまろが門かどの冠かぶ木き門もんも、足爪あしづめ立たつれば脊せき届とどくなり。

さてその国麿くにまろはと想おもう、渠かれはいま東京とうきやうに軍人いくさうじんにならむとて学問がくもんするとか。烏帽えぼし子しかぶ被かぶりて、払は掉たきぶりしかの愛あいらしき児こは、煎餅せんべいをば焼やきつつありとぞ。物干ものほし棹しざお持もてりしは、県庁けんていに給たま仕勤しきんむるよし。いま一人ひとり、また一人ひとり、他の一人ひとりにはわれ偶ふと通とおにて出合であひたり。その時渠ときかれ

は道具屋の店に立ちて、皿茶碗など買うたりき。

皆幸なるべし。

伯母上はいかにしたまいけむ、もの賭けて花がるたしたまいたりとて、警察に捕えられ
たまひし後、一年わが県に洪水ありて、この町流れ、家の失せし時にも何の音信も無
かりしとか。惟うに、身を恥じていづくにか立去りたまひしならむ。かの時の、その夜よ
り、直に小親に養われて、かく健に丈のびたる、われは、狂言、舞、謡など教えられつ。
さればこの一座のためには益なきにもあらぬ身なり。ここに洪水のありし事は、一昨
りけむ、はたその前のなお前の年なりけむ、われ小親とともに、伊予の国なる松山にて興
行せし時間及びつ。かかるべしとは思わでありし、今年またこの地にて興行せむとて、一
座とともに来りたる八年前のふるさとの目に見ゆるもの皆かわりぬ。

二

たそがれに戸に出ずる二代目のおさなき児等、もはや野衾の恐なかるべし。旧のかの
酒屋の土蔵の隣なりし観世物小屋は、あとも留めずなりて、東警察とか云うもの出来たり。

一座が掛りたる飯小屋は、前に金魚養いし女房の住みたる家のあとを、その隣、西の方、二軒ばかり空地となりしに建てられつ。小さき池は、舞台の真下になりたれば、あたかも可しとて、興行はじむる時、大瓶一個、俯向けて埋めたり。こは鼓の音冴えさせむとてしたるなりき。

揚幕より推出されて、多勢の見物の見る目恥かしく、しのぶ、小稲とともに狂言のなかに立交りて、舞台上に鞠唄うたいし声の、あやしく震いたるも多日がほどぞ。

振のむずかしき、舞の難き、祭礼に異様な衣装して大路を練りありくそれとは同じかず。芸に忠にして、技に実なる、小親が世における実の品位は神ありて知りたまわむ、うつくしき蒲団に坐る乞食よと、人の口さがなく謂わば言え。

何か苦しかるべき。この姿して、この舞台に立ちて、われは故郷の知人に対していささかも恥ずる心なかりしなり。

されども知りたるは多からず。小路を行交う市人もすべてわが知れりしよりは著しく足早になりぬ。活計にせわしきにや、夜ごとに集う客の数も思い較ぶればいと少し。

物語の銀六は、大和巡する頃病みてまかりぬ。小六はおいたり。しのぶも髪結いたり。小稲はよきほどの女房とはなりぬ。

その間、年に風雨あり。朝に霜あり。夕に雪あり。世の中とかく騒がしかりければ、興行の収入みいり思うままならで、今年この地きたに來りしにも、小親は大方ならず人に金借りたるなり。

楽しき境遇にはあらざれど、小親はいつも楽しげなりき。こなたも姉ひとと思う女ひとなり、姉とも思う人なり。

さりながら、ここにまた姉上と思いまいらせし女ひとこそあれ。

ふる里の空のなつかしきは、峰の松の左に傾きて枝を垂れたる姿なり。石の鳥居なり。百日紅なり。砂いさごのなかなる金色こんじきの細きしやごなり。軒に見馴れしと思ふ蜘蛛の巣のおかしかりし状さまさえ懐しけれど、最も慕わしく、懐しき心に堪えざりしは、雪とて継母むすめの女なる、かの広岡の姉上なりき。

伯母上にそのあしきことありし時、姉上は広岡の家に來よとのたまいぬ。小親は狂言の樂屋きたに來れと言いぬ。二人の顔を見かわして、わが心動きしはいずれなりけむ。継母の聲したれば、ふと小親のあたたかき肩シヨオル掛の下に、小さきわが身体からだひそみにき。

寂しかりしよ、わかれの時、凍いてたる月に横顔白く、もの憂きことに寔やつれたまいし、日頃さえ、弱々しく、風にも堪えじと見えたまうが、寢ねまき着姿の肌薄きに、折から身を刺こがらしす風

なりし。悵ちようぜん然ぜんとして戸よに倚よりて遙はるかに此方こなたを見送りたまいし。あわれの倂おも眼前かめさきを去さらず、八年やとせ永ながき月日げつじつの間、誰たがこの思おもはさせたるぞ。

広岡の継母に、かくて垣越かきに出会いしは、ふるさとに帰かへりし日の、二十日過すぎぎたる夕暮ゆふぐなりけむ。

三

舞台には隣間りんかん近ちかなり。ここに居ゐても、この声こゑの聞きえやせむかと、夜よごとに枕まくらを敬そてなどしつ。おもて立ちて訪まずれむは、さすがに憚はまりありたれば、強こゝろいて控ひかえたり。余よ所そながら姉上あねがみの姿見すがたばやと思おもいて、木き槿むくげ垣がきの有ありしあと思おもうあたりを、そぞろ歩あ行きして、立ちて、伺うかがいしその暮方くれがたなりき。

ふとこの継母ついでとわれは出逢いであいつ。

幼おさな顔がは覚おぼえ染そみて忘れわざりけむ、一目見ひとめるよりわれをば認ためつ。呼よ懸こけられたれば隠えれも得えせで、進すす寄りて、二ツ三ツものいううち、青楓あおきの枯かれたるをはじめとして、継母ついではいたずらに数々かずかずのその昔むかしをぞ数かずえたる。

「あんたに面と向うては言い悪い事じやがの。この楓の樹な、はや見るたびに腹が立つ。憎にくいやつで、水の出た時にの、聞きいてくんなされ。

あんたの家うちも、私わし家とこも、同ひと一とつに水みびたり。根太ねだの弛ゆるんだはお互様じやが、私わしが家とこなど、随分どだいと基礎とだいも固かし、屋根もどつしりなり、ちよいとや、そつとじや、流ながれるのじやなかつたに、その時ときさの、もう洪水みずが引ひき際ぎというに、洪どつとそれ一瀬ひとせになつて打ぶつ着つると、あんなの内のこの楓の樹が根ねこぎになつて、どんぶりこと浮うき出でいてからに、宅うちの、大黒柱だいこくちゆうに突つき当あつたので、それがために動うき出でいて、とうとう流ながれたというもんじや。ハヤ実に：
：誠まことに、何も何も、それを怨うらむのじやありやせぬけれど、いつまで経たつてもこいつの憎にくいは忘れられませぬ。因よつて、お宮様みやさまの段だんにしがらんで、流ながれずに残のこつていたのを、細こい処ところは焼やいてしもうたが、これだけは残のこしておいて、腹はらの立たつ時ときは見ています。」
それを楓かえでの知しることか。われは聞きくに堪たえざれば、冷ひやかに去いらむとせしが、この継母けいぼに、その女むすめのこと、なつかしきわが姉上あねがみのこと問とわむと思おもいたれば堪たえてたたず。

「そして何か、今あんたは隣となりに勤こめていなさるのかな。」

軽いんじ賤いやしむる色いろはその面おもてに出でたれど、われは逆さからわで領うなぎぬ。かの人の継母けいぼなれば、心こころからわれも渠かれに對たいしては威いなきものとなれるなるべし。

「うう、何、それでも結構じや。口すぎさえ出来れば、なあ、あんた。」

ただ微笑ほほえみて見せぬ。姉上のこと疾とく語らずや、と思うのみ。

「ええ、ところで、おおそれさ、あんたの一座の中じやそうなの。ええ、何とかいう、別べ嬪つびんが一人居なさるそうじやな。何とか言うたよ。あんた、知ってじやろう。」

と言いかけて少し歩み寄りたり。その不快なる顔、垣の上に又ト出でて、あたかも梟きょう首しゆせられたるもののごとくに見ゆ。

「小稲ですか。」

「小……稲、いや、違うた。稲じやない、稲じやない、はて、何とか言う。」

眉しかを顰しかめながら顔を斜ななめにす。太いたく考さうる状さまなれば、あえてその意を迎えむとはあらねど、かりにもかの女の母むとなれば、われは遂つひにわが惜おししき小親の名語りたり。

「違いますか、小親。」

「うむ、それぞれ、それぞれその小親と言うのじや。小親じや。ははははは。」

蓮葉はすはなる笑声、小親にや聞えむかと、思わず楽屋なる居室いままの方見かたられたり。

継母は憚さまる状なく、

「その小親、と言うのは、あんた、中が好いいのかな。」

「何です、小母さん。」

四

「はッはッはッ、可愛がられておいでじやろ。私は早あんたが掌へ乗つかるとな時の事から知つとるで、そこは豪いもの。顔を見るとちやんと分ります。可愛がられると書いてある。」

快よからずニタニタ笑いて、

「そしてその小親と云うのは幾歳いくつにおなりだ。はははは、別嬪べっぴんざかり盛じやと云えば、十七かな、八ぐらい？」

「いいえ、二十二。」

「む、二十二はちようどいい。二十二は好い年じや。ちようどその位な時が好いものじや。何でもその時分さかりが盛じや。あんたも佳い別嬪べっぴんざかりに可愛がられて羨うらやましいの。いんえ、隠しなさるな、書いてある、書いてある。」

「小母さん、何です。」

た上品で、古風で可いもんじやよ。私も昔馴染じやから、これ深切で言いますが、気を着けなされ。む、気を着けなさい、女では失策るよ。若い時の大毒は、女と酒じや。お酒はあがりそうにも見えぬけれど、女には、それ、可愛がられそうな顔色じや。

いんえ、串戯ではない、嘘ではない。余所に面白いことが十分あると見えて、それ、たまたまで、顔を見せても、雪の雪の字も言いなさらぬ。な、あの児も、あなたには大きに苦勞をしたもんじやが。

早や懺悔だと思いなさい。私もあの時分は、意地が張つて、根性が悪うて、小児が、その嫌いじやつたでの、憎むまいものを憎みました。が、もう年紀も取る。ふつつりと心を入れかえました。優しい女での、今もそれ言う通り、あんまりあなたを可愛がるもんじやから、私は羨しいので、つい、それ嫉妬を焼いて、ほんに、貢さんの半分だけなど、私を可愛がってくれたらなど、の、嫉妬の故に、はははは、あなたにも可い顔見せず、あの女にも辛かったが、みんな貢さん、あなたのせいじや。

ほんに、そのくらいまでに、あなたを思っているものを、何と、貢さん、私の顔を見ながら、お雪はどうした、姉さんは達者かと、一言ぐらいは、何より先に云つてくんなされても可さそうなものを、小親に可愛がられるので、まるで忘れるとは、あんまりな、薄情

だ。芸人になればそんなものか、うらみ怨じやよ。」
にわかしめ俄に肅やかなるものい言語ぶりなり。

五

その時の我顔を、継母はじつと見しが、にわか俄に笑い出しぬ。

「あのまじめ真面目な顔が、ははは、じょうだん串戯じゃ、串戯じゃ。

何の、そんな水臭い人でない事は、わし私がちやんと知っている。むむ、知つとるとも。

あんず杏や、桃を欲しがつた時分とは違うて、あんたあんた色気が着いた。それでな、もと旧のように、

小母さん、姉さんは、いいにくと言悪い。ところで、つい、言いそそくれておしまいのである。

何、むかしなしみ馴染じゃあるけれど、今では女というものが分つたで、女と男、男と女、女と

男ということが胸にあるに因つて、私に遠慮をして、雪のことをちよつと口へ出しにく悪い、

とまあいうたわけじやの、違うまい。むむ。」

おもて面を背けてわれは笑いぬ。継母はうちうなず打頷き、

「それ見なされ。そこは何と言うても小母さんじゃ。胸の中は、ちやんとみとおし見通の法印様。

それで私も落着いた。いや、そういう心なら、もちつとも怨みには思いませぬ。どうして、あんたのような優しい児が、いかに余所に良いことが出来たとて、さっぱりふいと、こつちを忘れなさるとは思やせなんだが、そこは人情。またどうであろうと思うたで、ちよいと気を引いてみたばかり。

悪く取られては困ります。こんな婆々が、こんな顔で、こんな怨みっぽい事を言うたで、何んとも思いはしなさるまいが、何じやよ、雪が逢うてもこう言います。いま私の言うたような事を言いますわいの。それはの、言うわけがあるからで。

けれども、あの女は、じたい、無口で、しんみりで、控目で、内気で、どうして思う事を、さらけ出して口で云えるような性ではない。因つて、それ、私が、その心を察して、あの女の代りに言いました。

雪じやと思うて聞きなさい。そこは、私がちゃんとあんたの胸の裡を見透したように、あの女のお腹なかも破ったように知つとるで、つい、嫌味なことを言うたもの。

あんたがそうした心なら、あの女が何、どうしていようと、風が吹くとも思やせぬ。：泣いていようと、煩つていようと、物も食べられないで、骨と皮ばかりになっていようと、髪の毛を、られていようと、生爪をはがれて焼火箸で突かれていようと、乳の下

を蹴つけられて、呼吸の絶えるような事が一日に二度ぐらいずつはきつと有ろうと、暗い処に日の目も見ないで、色が真蒼まっさおになつていようと、踏ふみにじられてひいひい呻うめいていようと……そちの事じゃ、私わしは構わぬ。ふむ、世の中にはそんな事もあるものですか、妙だね、ふふで聞き流いて、お能の姉さんと面白そうに、お取贖とりせんで何か召あがつておいで遊ばすような事もあるまいと思われる。な、あんた。」

顔の色も変りたるべし。冷たき汗にわが背のうるおいしぞ。黙して聞かせることかは。堪えかねたれば遮りたり。

「姉さんは御機嫌ですか。」

継母は太き声にて、

「はい、生きてはいます。死にはせいで、ああ、息のある内に、も一度貢さんの顔が見たいと云うての。」

「え！」

「それが、そういう事口へ出しては謂いわれぬ女こじゃで、言いはせぬ。けれど、そこは小母さんちゃんと見通し。ま、この大きくおなりの処を見たら、どんなにか喜ぶである。それこそ死なずにいた効かいがあると、喜びますじやろ。ああ、ほんとうに。」

「小母さん、逢いたい。」

「む、逢いたい、いや、それは小母さんちゃんと見通し。」

「お目にかかりたい、小母さん。」

「道理もつとじゃ。」

「逢わして下さいな。」

と垣に伸上りぬ。継母は少し退りて、四辺あたりを見まわし、声を潜め、

「養子がの、婿がの、その大変な男で、あんたを逢わしたりなんかしようもんなら……それこそ。」

井筒

一

「貢さん、何をそんなにお鬱ふさぎだ。この間から始終くよくよしておいでじゃないか。言っ

てお聞かせ、どうしたの。何も私に秘す事は無いわ。」

二三日来、小親われを見ては憂慮きづかいて、かくは問うたりき。心なく言うべきことにあらねば語らでありしが、この夜は渠かれとわれとのみ、傍かたわらに人なき機おりなり。

「私の事じゃないよ。」

「おや他人ひとのことで苦労してるの、お前さんは生意気だね。」

と打微笑うちほほえむ。浮きたる事にはあらじ、われは真顔になりぬ。

「だって何も心配をするのは、我身の事ばかりなものではない。他人ひとのだって、しなきやならない心配ならしようじやないか。お前さんだって、私のことを心配おしだから、それで聞くんじやないか、どうしたツて？」

「はい、はい。沢山たんと心配をしておあげなさいまし。御道理ごもつともなことだねえ、ほほほ。」

「また、そんな、もう言うまいよ、詰つまらない。」

「ま、承りましょう。可いいからお話しなさい。大方、また広岡のお雪さんのこツたろう。」

「え、知ってるの。」

「紅花染べにはなぞめだね。お前さんの心配はというと、いつでもお極きまりだよ。またどうかしたのかい。」

「ああ、養子が大変だと、酷いんだとき。あの、恐い継母が、姉さん、涙を流して、密と話した位だもの。大抵ではないと、そうお思い。お雪さんが可哀相つちやない。ようよう命が有るばかりだと言うんだもの。姉さん、真面目になつて聞いておくれ。いやに笑うねえ。」

「ちつと妬けますもの。」

「詰らない、じゃあ言うまい。」

「いいえ承りましょう。酷いかね、養子にや可いものだと云うけれど、そつちが酷くつて、こつちが苛められるのは珍しいね。そして、あの継母が着いてるじゃあないか。貢さんに聞いたようでは。養子に我儘なんかさせそうにも思われないがね。」

われも初めは現在小親の疑うごとく疑いたるなり。

「それがね、姉さん、皆金子のせいですとき。洪水が出て、家が流れた時、旧あつた財産も家も皆なくなつてしまつてね、仕方が無い時にその養子を貰つたんだつて。」

「持参金かね。」

「ええ、大分の高だというよ。初ツからお雪さんは嫌つていた男だつてね。私も知つてる奴だよ。万吉でつて、通の金持の息子なの。ねえ、姉さん、どういふものか万の字の着

いたのに利口なものは居ないよ。馬鹿万と云うのがあるしね、はねまん 万だの、それから鼻万だのツて、みんな 皆嫌な奴さ。ありや名でもつて同じおんなような申分のあるのが出来るのは、土地に因るんだとね。かえつて利口なものも有るんだつて。」

「また、詰らないことを言出したよ。幾歳いくつだねえ、お前さんは。そんなこと云つていて、人の心配も何も出来るものじゃない。」

「だつて、それに違いないのだ。あのお雪さんの養子になつてるのは、やつぱり万という名だからさ。私がね、小さい時、万はもう大きな身からだをして、良い処の息子の癖に、万金丹売のね、能書のうがきを絵びらに刷つたのが貰いたいつて、革靴かばんを持つて、お供をして、嬉しがつて、威張つて歩行あるいた児こだものを。誰が、そんな。

だからお雪さんも嫌つていたんだそうだけれど、どつさりお金子かねを持つて来ると言うので、あの継母がね、是非婿にしよう、しなけりやあなりませんと、そう云つたんだ、と。お雪さんが嫌だと云つたけれど……あの、姉さんも知つてるはずだよ。……私の内に楓の樹があつて、往来へ枝がさして茂つてたのが、あすこの窓へ届いたので、内が暗くつて、仕様がな。貢の内へ掛合つて、伐きらしてしまふと言つた時分に、私は何も知らないけれど、お雪さんが、あれだけは、そんなかわいそうな事をしないで下さい。後生ですつて、

止めたんだ。……それがあの洪水みずの時に流れ出して、大丈夫だった広岡の家うちへ衝突ぶつかつたので流れただろう、誰のおかげだ……」

二

「……皆みんなお前のせいじゃないか。あの時とき伐きらしてさえおけば、こんなに路頭に立つようになるまで、家うちを流されるんじゃないやなかつたツて、難題を言つて、それで、お雪さんも仕方なしに、その養子をしたんだつて。……それが酷ひどいんだ。」

小兒こどもの内は間抜けのようだったけれど、すっかり人が異かわつて、癩癩かんしゃくもち持もちの乱暴な奴になつたと見えるんだよ。……姉さん、年とし紀がゆくと変るものかしら。」

小親は火箸もて炭を挟みたる手を留めて、

「そりや、変るね。貢さんだつて考えて御覽なさい、大そう異かわつたじゃあないか。」

「私は何、大きくなつたばかりだね。」

「いいえ、ちつと憎らしくもおなりだよ。」

「そうかね。」

「その口だよ、憎らしい。」

「じゃ沢山憎んでおくれ。可いよ、どうせ憎まれツ兎だ、構やあしない。」

小親は清しき目を睨りぬ。

「いいえ、可愛がるよ。」

「そんな事いうからだ。今でも皆でなぶつて不可い。いろんな事をいうもんだから、人前でうっかりした口も利けまいじゃないか。一所に居て、そうして、何も私は姉さんにものを云うのに、遠慮をすることは要らないわけだと思うけれど、皆がなぶるから、つい、何でも考えてしたり、考えてものを云つたりしなけりやならないよ。窮屈で弱ってしまう。皆がどうしてああだろう。」

莞爾して、

「さようでございますね。」

「ほんとうにお聞き、真面目でさ。」

「畏まりました。」

「そら、そうだから不可いよ。姉さん、姉さんというものはね、年のいかない弟に、そんなことをするもんじゃあないよ。ちゃんと姉顔をして澄していなくつちやあ。妙にお客あ

しらいで、私をばお大事のもののようにして、その癖ふぎけるから、皆が種々なこと云うんじやアあるまいかね。立派に姉さんの顔をして、貢、はい、というようにして御覽。おかしなことは無くなるに違いないから。そうしてなかよくして、ね、可愛がつておくれ。私も心細いんだもの。」

いいかけて顔を見合せぬ。小親は炭を継ぎて火箸もて、火をならしながら、ややありて後しめやかに領きたり。秋の末なれば月の影冷かなりし。小親は後むきて其方を見たる、窓少し開きたりしが、見たるまま閉めむともせで、また此方に向きぬ。

「そして、お雪さんはどうしたの。」

「それがね、酷いんだ。他人の口から言つたのなら何だけれど、あの、継母が我身で我身の邪慳だつたことを私に話したんだよ。

そんな風にして、無理に推着けて婿を取らしたが、実は何、路頭に立つなんて、それほど窮りもしなんだのを、慾張りで、お金子が欲しさに無理に貰つたが悪いことをしたツて、言うんだ。

それがというと、養子の奴が、飛んだ癩癩持で、別に、他に浮気なんぞするでもなしに、朝から晩まで、お雪さんを苛めるんだつてね。今まで苛めていた継母さえ見るに見兼ねる

と云うんだから酷いではないか。ねえ、姉さん。

それに、はじめお雪さんを無理強いにした言草いいくさが、私の内の楓の樹で、それをお雪さんが太く庇ひじつて伐きらさなかつたからこんなことが起つたんだってね、……そしてなぜ楓の樹を伐きらさなかつたろう。それは一ツ貢さん、あなたが考えて見ておくれッて継母が言いましたさ。」

煙管きせるをば取りあげつ。小親は煙草たばこの箱弾はじきながら、

「そして。」

「私、考えた。」

三

「何だか分りませんッて、継母には言つたけれど、考えて見ると、何だかねえ、遠い処かすかに、幽かすかに小さい、楓の樹のこんもり葉の繁つたのが見えて、その緑色が濡ぬれているのに、太陽ひがさして、空が蒼あおく晴れた処あおに、キラキラとうつくしいものが振ぶらさが下さがつて……それにね、白い手で、高い処の枝えだに結ゆわいつけておいでのお雪さんが、夢のように思い出されるんだよ。

だもんだから、何だか私のために、お雪さんが、そんな養子を推着けられて、酷いめにあわされているようにね、何ということなしに、我身で極めてしまったんだもの。可哀相で堪らないんでね、つい、鬱ぐの。」

言うほどにまた幻見ゆ。空蒼く日の影花やかに、緑の色濃き楓の葉に、金紙、銀紙の蝶の形ひらひらと風にゆれて、差のぼしたまう白く細き手の、その姉上の姿ながら、室の片隅の暗きあたり鮮麗にフト在るを、見返せば、月の影窓より漏れて、青き一条の光、畳の上に映したるなり。うつとりせしが心着きぬ。此方には灯影あかく、うつくしき小親の顔むかいあいて、額近きわが目の前に、太く物おもう色なりき。

われは堪えず俯向きぬ。

「そしてまあ、その継母はまた何だつて遠まわしに、貢さんのせいのように推つけて聞かしたんだろうね。お前さんにどうかしてくれろというのかね。貢さん、お前さんが心配をすればどうにかなるとでもいうような事を、継母が知ってて言うようにも承れるがねえ。一体どうしたというんだろうね。」

小親は身に沁みて聞きたりけむ、言う声も落着きたり。

「でね、継母がそういったよ。貢さん、あんたは小親という人に可愛がられているんだろ

うツて。」

「お前さんは、何と言ったの。」

「黙っていました。」

「そうかい。」

とばかり寂しく笑いぬ。煙管きせるは火鉢よこに横よこうたり。

「どうしたの、姉さん。」

「何、可いいよ。」

「だっておかしいもの、ね、そりや私を可愛あがつておくれだけれど……何だか、おかしいなあ。」

「何が、え？ 何がおかしいの。」と口早まぶたにいう、血の色薄まぶたく瞼まぶたを染めぬ。

「何も気をまわすことはないよ、真面目まじめじゃあ困るわね。私あ何とも思しやしない、串じょうだ戲んさ。なぜね、そういうことを聞いたら、そりや可愛あがつてくれますとも、とこうお言いいじゃないツて云うのさ。串戲んだよ、串戲んだけれどもねえ、その位にさばけておくれだと、それこそお前さんの言い草くさじゃあないが、誰も冷かしたり、なぶったりなんぞしないようになつちまうわね。え、貢いさん、そうじゃないか。しかし不可いけないかい。」

「だつて極きまりが悪いもの。」

「なぜさ。」

「なぜツて、そう云うとね、他人は何だもの、姉きょうだい弟だいだと思わないで、おかしく聞くんだからね。」

「何と聞えるんだね。」

「何だか、おかしい。」

「まあさ、何と聞えるんだねえ、貢さん。」

「それはね、あの……」

「何だね。」

「お能の姉さん。」

「厭いやだよ！」

四

「しかし御察しの可いいことね、継母もどうして洒落しやれてるよ。そう云つてくれたのなら、私

やその人に礼を言おうや。貢さん、逢ったら宜しくと申しておくれ。」

「むこうでもそう云ったよ。小親によろしくツて。」

「何のこツたね。」

「それが、何だつて、その養子がね、大層姉さんのことを、美しい女だつてね、云つてるそ
うだ。」

煙管きせるを落して、火鉢の縁をおさえつつ、小親は新しくわが顔みまもを瞻りぬ。

「いつか見物をしたんだらうね。」

小親はこれを聞きて笑えみを含み、

「貢さん、もう大抵分つたよ。道理でお前さんは妙な顔をしちやあ、こないだッから私を
見ていたんだわ。ああ、そしてお前さんはどう思います。」

「何をさ。」

「何をつて、継母はお前さんに私とながが好いいかツて聞いたらう。」

「そりや聞いたよ。今も話したように。」

「道理で。」

とまた独り頷うなずきつつ、

「貢さん、そして何だろう、お前さんの口から、ものを私に頼んでくれと言やあしないかい。」

「ええ。」

「云つたらうね、ほほほ、解わかつてるよ、解わかつてるよ。」

とまた笑えり。

「独ひとりで承知をしてるのね、姉さん。」

「うっかりじゃあないわね、可いいよ、まんざら知らない方じやあなし、私も一度お目に懸かつて、優しそうな可いい方だと思つてるもの。お雪さんがそんな酷ひどいめに逢つていなさるんなら、可いいよ、貢さん、お前さんにつけて、その位なことならばしてあげようや。」

と静しずかかにいう、思いいの外なれば訝いぶりもし、はた危あやみもしつ。

「解つてるの。姉さんがどうにかしておくれなら、それを言ぐさにして、不ふ品み行もちだからつて、その養子を出してやろう。そんな奴やつだけれど、ただ、疎そがあるの、不ふ遇あをするのツて、お雪さんを苛いめるばかり。何も良お人の権とだから、それをとやこう言うわけのものではない。他ほかに落お度は無ないものを、立派な親類が沢山控おえているにつけて、こつちから手の出しようがない。そんならつて、浮う気きなどするんじやなし、生き真ま面目めだから手も着きけら

れないでいたのに、ついぞ無い、姉さんを見て、まるで夢中だから、きつとその何なんだ
 って。そして、どうかしておくれなら、もう一ひとかど廉のものいいがつく。きつと叩き出して
 お雪さんを助けると継母が云うんだがね。——承知だ、宜しいッて、姉さん、どうして分
 ったんだね。どうして知っておいでなんだい。」

小親は俯うつむ向きたる顔をあげて、

「貢さん、お前さんは何とも思つちやあいまいけれど、私は何だよ、お前さんの事はとい
 うと、みんな夢に見て知ツてるよ。この間だっけ、今だから云うんだがね、真ま闇な処で
 ね、あツと云う声が聞えるから、吃びっくり驚して見ると、何だったの。獣けだもののね、恐ろしいもの
 に追懸おっかけられて、お前さんと、お雪さんと抱き合つて、お隣の井戸の中へ落おっこちたのを見
 て、はツと思つて目が覚めたもんだから。……」

われは悚りつぜん然として四辺あたりを見たり。小親は急に座を起たちしが、衣きぬの裳踵すねかどにからみたるに、
 よろめきてハタと膝折ひざまりたる、そのまま手を伸べて小窓の戸閉とじしたり。月の明り畳うに失せ
 て、透間すきま洩もりし木の葉この影、浮いてあがるようにフト消えて見えなくなりぬ。一室ひとまの内燈ともしびの
 限くまなくはなりたれど、夜の色籠こもりたれば暗かりき。さやさやと音さして、小親は半纏はんてんの
 襟引合せ、胸少し火鉢の上に蔽おほうよう、両手をば上げて炭火にかざしつ。

「もつとお寄りではないか。貢さん、夜が更けたよ。」

五

裕あわせの上より、ソトわが胸を撫なでて見つ。

「薄着のせいかね、動悸どつきがしてるよ。お前さん、そんなに思い詰めるものではないわ。そりやお雪さんのことを忘れないで、心配をしておあげなのは、お前さんが薄情でないからで、私だつて嬉しいよ。ねえ、貢さん、実のある弟を持ったと思つて、人のことに心配をおしの中でも、私は悪い気はしませんよ。けれども、そんなに思い詰めちゃあ、ほんとうに大事な身体からだをどうおしだえ。気味の悪い夢だったから、心配でならないので、稲ちゃんにもそういつて、しよつちゆう気を着けていたんだもの。人にかくれちゃ、継母とちよいちよいおはなしのことも知ってるんだよ。こつちから言い出す分ではなかったから、知らない顔で見えていたけれど、堪たまらないほどお鬱ふさぎだもの。可いいよ、もうどうにかしてあげようや、貢さん。」

吐息もつかれ、

「じゃあ、姉さん、あの養子を、だましてくれるの。」

「ま、しようがないわね。」

「だって、酷い奴だというよ。」

「たかが田舎者さ。」

「そして、どうして？　姉さん。」

「狸を御覧よ、ほほ、ほほほ。」

「ああ、一人助かった。」

小親が顔の色沈みたり。

「しかし、貢さん善いことだとは思うまいね。」

胸痛かりし。われは答にためらいたり。

「善いことだとは思うまいね、貢さん。」

その心にわか料りに料りかねたる、胸はまた轟きぬ。

「私や、芸人でありながら、お前さんに逢つてから、随分大事に身を持ったよ。よ、貢さん、人に後指さされちゃあ、お前さんの肩身が狭いだろうと思つたし、その上また点を打たれる身になるとね。」

小親引寄せて、わが手を取りたり。

「お前さんは何にも知るまいけれど、どうせ、どうせ、姉の役ツキやあ勤まらない私だけれど、姉だつて、よ、姉だつて、人に後指さされたり、ちつとでも、お前さんところやつていることの、邪魔になるような人が私に有つては厭いやだから、そりや随分出来にくい苦労もしたものの。何にも恩に被きせるんじやあない。怨うらみをいうんじやあない。不足を云うんじやないけれど……貢さん、広岡のお嬢さんの顔が見られるようになりさえすりや、私や、私や、どうなつても可いのかい。よ、よ、私やどうなつても、可いのかよう。」

烈はげしく手の震いたればか、何のはずみなりけむ、火箸横に寝て、その半ば埋うずれしが、見る間に音もなく、ものの動くともなく、灰の中にとぼとぼと深く沈みたり。

「あら、起しますよ。」

「可いよ。」

わが指のさき少しく灰にまみれたれば、小親手首を持添えて、掌たなそこをかえしてじつと見つ。下着の袖口引ひき出して払い去るとて、はらはらと涙をぞ落したる。

わが身体からだの筋皆動きぬ。

「御免なさい。」

小親は涙ぐみたるまま目を睜^{みは}りぬ。

「御免なさい。私が悪かった。」

さしうつつむきて声を呑みたり。

「悪かった、姉さん、さげすんでおくれでない。広岡の姉さんも私にやあどんなにか優しく
かつたろう。母^{おつか}さんのなくなつた時から、好^{すき}な琴弾かなくなつておしまいだもの。このく
らいな思^{おもい}を私がするのは、一度は当^{あたりまえ}前^{まえ}だつたと思つて、堪忍しておくれ。悪かった、
ほんとうにさもないことだつた、姉さん、姉さん。」

こたえなければ繰返しぬ。

「姉さん！」

ひたと寄り添い、肩^{いだ}を抱きて、屹^{ぎつ}と顔を見合せぬ。

「あれ！」

と叫^いう声、広岡の家より聞えつ。

重井筒

井戸一ツ地境じぎかいに挟まりて、わが仮小屋にてその半なかばを、広岡にてその半なかばを使いたりし、蓋ふたは二ツに折るるよう、蝶ちよう番つがいもて拵こしらえたり。井戸の蓋と隔ての戸とをこれにて兼ね、一方を当てて夜ごとには彼方かなたと此方こなたを垣かきしたる、透間すきま少し有りたる中より、奮はげ発ずみたる鞞まりのごとく、衝つと潜くぐり出でて、戸障子に打衝うちあたる音すさま凄まじく、室まの内に躍り込むよと見えし、くるくると舞いて四隅の壁に突当る、出処ひつかえなければ引返ひつかえさむとする時、慌あわただしく立ちたるわれに、また道を妨げられて、座中ざなかに踞うずくりたるは汚うき猫ねこなりき。

背をすくめて四足を立て、眼いを瞋いからして呻うなりたる、口には哀あれなる鳩と一羽くわえたり。餌えにとて盗ぬみしな。鳩とはなかば屠ほちられて、羽はの色いろの純白まなるが斑まだらに血あの痕あとをぞ印おしたる。二ツ三ツ片かた羽は羽はたたきたれど、早さや弱より果はてたる状さまなり。

「畜生！」

と鋭く叫び、小親片膝立てて身構えながら、落ちたる煙管きせるの羅宇らお長ながきを、力籠こめて掉ふかりぎせし、吸残りけむ煙草たばこの煙、小さく渦巻うずまきて消え失うせたり。

「あ痛、あ、あ、痛。」

うつくしき眉を擧めつつ、はたと得物を取落しぬ。

驚きてわが走り寄る時、遁路あきたれば潜り抜けて、猫は飛び出で、遠く走る音して寂然となりたり。

「どうしたんだね、姉さん、どうしたんだね。」

小親は玉の腕投げ出して、右手もて擦りながら肱を曲げ、手の甲を頬にあてて、口もてその脈の処を強く吸いぬ。

「儂麻質かい、姉さん。」

と危ぶみ問いたる、わが声は思わず震いぬ。

「あら、顔の色を変えて、真蒼だね。そんなに吃驚したのかね、気の弱い。」
かえってわれを激ましぬ。

「いいえ、猫にも驚いたけれど、りゆうまちじゃあないかい、え、儂麻質じゃあないかい。」

「ちよいとだよ。何でもないんだよ、何をそんなに。たかがりゆうまちだもの、生命を取られるほどのことは無いから。」

「でも、私はもう、儂麻質と聞いても悚然するよ。何より恐いんだ。なぜッてまた小六さんのように。」

「磔！」

言いたる小親も色をかえぬ。太き溜息吻とつきて、

「鶴亀、々々。ああ、そういつたばかりでも、私や胸が痛いよ、貢さん、ほんとに小六さんもどうおしだろうね。」

物語の銀六は、蛇責の釜に入りたる身の経験ありたれば、一たびその事を耳にするより、蒼くなりて、何とて生命の続くべきと、老の目に涙泛べしなり。されど気丈なる女なれば、今なお恙なかるべし。

小親いまだその頃は、牛若の役勤めていつ。銀六も健かに演劇の真似して、われは哀なる鞠唄うたいつつ、しのぶと踊などしたりし折なり。

あたかもいま小親が猫を追むむとて、煙管翳したるその状なりしよ。越前府中の舞台にて、道成寺の舞の半ばに、小六その撞木を振上げたるトタンに左手動かずなり、右手も筋つるとて、立すくみになりて、楽屋に昇かれて来ぬ。

しからざりし以前より、渠はこの儂麻質の持病に悩みて、仮初なる俵の上下にも、小

幾、重子など、肩貸し、腰を抱きなどせしなり。

月日に痛み重るを、苦忍して、強いて装束着けたりしが、その時よりまた起たずなりき。楽屋にては小親の緋鹿子のそれとは違い、黒き天鷲絨の座蒲団に、蓮葉に片膝立てながら、縹子の襟着いたる粗き豎縞の布子羽織りて被つ。帯もゞ《し》めで、懐中より片手出して火鉢に翳し、烈々たる炭火堆きに酒の爛して、片手に鼓の皮乾かしなどしたる、今も目に見ゆる。

手の利かねば、割膝にわが小さき体引挟みて、波面つくるが可笑とて、しばしば血を吸いて、小親来て、わびて、引放つまでは執念く放たざりし寛闊なる笑声の、はじめは恐しかりしが、果は懐しくなりて、その後より小さき手に目隠して戯れたりし、日数もなく、小六は重き枕に就きつ。

湯を呑むにさえ、人の手かりたりしを、情なき一座の親方の、身の代取りて、その半不隨の身を売りぬ。

買ったるは手品師にて、観世物の礫にするなりき。身体は利かでも可し、槍にて突く時、手と足きて、苦と苦痛の声絞らすまでなれば。これにぞ銀六の泣きしなる。

「ほんとにねえ、貢さん。」

二

小親ゆ行きて、泣く泣く小六の枕まくらもと頭にその恐しきこと語りし時、渠かれの剛愎ごうふくなる、ただ冷ひやかに笑やいしが、われわれはいかに悲しかりしぞ。

その時の小親、今の年とし紀ならましかば、断ちても何とか計らいたらむ。あどけなき人のただ優しくて、親方に縋すがりたれど、内に居ては水一つ汲くまぬ者なり。手足の動かぬを何にかせむ、歌うた妓ひめにも売れざるを、塵塚ちりづかに棄つべきが、目ざましき大金おおがねになるぞとて、北叟ほくそえみ笑したりしのみ。

そもそも何の見処ありて、小六にさる価あなほけう擲ちけむ、世には賤いやしき業わざも多けれど、誰はか十字架りつけに懸からむとする。

向うづけに屋根裏高き磔はりつけ柱ばしらに縛いましめられて、乳ちの下ひら発ひときて衆の前に、槍やりをもて貫くか

るを。これに甘んずる者ありとせむか、その婦人おんないかなるべき。小六の膚はだは白かりき。色の黒き婦人ものにては、木戸に入るが稀なりとて、さる価あなほけうをぞ払いしなる。手品師せんは詮せんずるに半ば死したる小六の身のそのうつくしく艶つやかなりし鳩尾きゅうび一斤

の肉を買いしなり。諸^{もろびと}人の、諸人の眼の犠^{いけにえ}牲に供えむとて。

売られし小六はおさなきより、刻苦して舞を修めし女^{ひと}ぞ。かくて十年二十年、一座の座^ざ頭^{がしら}となりて後も、舞台に烈^{はげ}しき働^{はたらき}しては、楽屋に倒れて、その弟子と、その妹と、その養^こう児と、取継^{たちおお}り立蔽^{きつけ}いて回生^{きつけ}剤を吞ませ呼び活^いけたる、技芸の鍛錬積りたれば、これをかの江戸なる家元の達人と較^{くら}べて何か劣るべき。

あわれ手品師と約成りて、一座と別れんとしたりし時、扇子もて来よ、小親。一さし舞うて見せむとて、留^{とど}むるを強いて、立たぬ足膝^{いざ}行り出でつ。小稲が肩貸して立たせたとれば、手酌して酒飲むとは人かわりて、おとなしく身繕いして、肅然と向直る。

小親は膝に手を置きぬ。

揚幕には、しのぶと重子、涙ながら、踞^{つゐ}居て待ちたり。

一息つき、きつと見て、凜^{りん}として、

(幕を！)

と高く声かけぬ。開けと云うなり。この声かかる時は、弟子達みな思わずひれ伏す。威なるべし。

さて声に応じて、「あ」と答え、棒をもて緞^{どんす}子の揚幕キリりと捲^まいて揚げたれば、舞台

見ゆ。広き土間^{さしき}敷^さ風^さ寂^さびて人の氣勢^{けはい}もなく、橋^{はし}がかり艶^{つや}かに、板敷^い白^{はく}き光^{ひかり}を帯^{おび}びて、天井^{すすかけ}の煤^{すす}影^{かげ}黒^{くろ}く映^{うつ}りたるを、小六^{せうろく}はじつと見て立^たつたりしが、はじめてうるめる声^{こゑ}して、
(親^{おや}ちゃん、)

とばかりはたと扇子^{せんす}落^おして見返^{みかへ}りし、凄^{せい}艶^{えん}なる目^めの中に、一滴^{ひとしずく}の涙^{なみだ}宿^{とど}したり。皆^{みな}泣^な伏^ふしぬ。迎^{むか}の俵^{はし}来^きたれば乗^のりて出^ででき。

可愛^{かわゆ}き児^この、何^{なに}とて小親^{せうしん}にのみは懐^{なつ}き寄^よる、はじめて汝^なが頬^ほに口^{くち}つけしはわれなるを、効^かなく渠^かに奪^とらるるものかは。小親^{せうしん}の牛若^{うしわか}きこそとならば、いまに見^みよ、われ癒^いえなば、牡丹^{ぼたん}の作^{つく}りもの物^{もの}蔽^{おほ}い囲^こむ石^{いし}橋^{はし}の上^のに立^たちて、丈^{たけ}六^む尺^{せき}なるぞ、得意^{とくい}の赤^{あか}頭^{がしら}ふつて見^みせむ。さらば牛若^{うしわか}を思^{おも}いすて、わが良^よき児^ことやならむずらむ。

と病^{やまい}の床^{とこ}に小親^{せうしん}とわれと引^ひきつけては、二人^{ふたり}の手^てを取り戯^{あそ}んで、小親^{せうしん}に顔^{かほ}赤^{あか}うさせし愉^{たの}快^{たの}の女^{むすめ}は、かくて手品^{てひん}師^しが人の眼^{まなこ}を眩^{げん}惑^{わく}せしむる、一種^{いっしゆ}の魔^ま薬^{やく}となり果^はてたり。

過^あ去^りりしことありのままに繰^{くり}返^せば、いままのあたり見るに似^にたり。

小親^{せうしん}と顔^{かほ}を見合^あせぬ。

「よく覚えておいでだね。」

いかでわれ忘^{わす}れるべき。

三

いかで忘らるべき。時々起る小親が同一病おなぢまいの都度、大方ならずわれは胸いたためぬ。

殊とまりに今は隣家あなやにて、啊呀あなやと一声叫びたまひし姉上の声の、覚えあるのみならず、猫の不意にも驚かされし、血の動きのなお止やまぬに、小親また腕かいなを痛めたれば、さこそわが顔の色も変りつらむ。

「姉さん、ほんとうに気を付けておくれ、またこの上お前が病気にでもなったらどうしよう。」

「案いじずとも可いいよ、ちよいとだわ。しかし小六ねえさんもどうしているんだらう。始終い懸けちやあいるけれど、まだどうにもしようがないが、もうこの節じゃあ、どこに居いなさるんだかそれさえ知れない位だもの、ねえ、貢さん。」

いい掛けつつ打うちしめ湿しめりて、

「ああなぜまあ私達はこうだらう。かわいそうに、いろんなことに苦勞をおしだねえ。」
「仕方がないんだ。」とわれは俯うつむ向きぬ。

「どうしてまた、お前さんを可愛がつてあげたいものは、こんなにふしあわせなんだろうね。小六ねえさんだつて、あんな気の強い人だったけれど、どんなにかお前さんを可愛い、可愛いツて、いつも言つたらう。それがああだし。」

いままたお雪さんだつて、そうじやあないか。お前さんも恋しがつてるし、むこうでもそんなに思つているものが、飛んだ、お婿さんを娶とつてまたそうだし……」

小親が口籠くちしもりて吐つくいきに、引入れらるるよう心細く、

「姉さんは何ともありやあしないだろうね。」

「え。」

「姉さんは何ともなからうね。」

「誰？ え、お雪さんかえ。」

「いいえ。」

「私？」

われうなず頷うなずきぬ。小親は襟うなだに首垂うなだれつつ、

「私、私なんざあ、どうせやつぱりはりつけ磔はりつけにでもなるんだらうき。親方持ちだもの、そりやこうして動ういてる内や可いいけれど、病い氣けにでもなつた上、永とく煩わづいでもしようもんなら、大

概さきが分つてゐるわね。」

「詰らない、そんなことが。」

と勢よく言いたれど、力なき声なりしよ。

「いいえ、算つても御覽、小六さんなんざ、いままでのお礼心で、据えておいたつて可いんじやあないか。私も世話になつてゐるし、内のは大抵皆小六さんに仕込まれた女だもの、座をこれまでにしたのは皆あの女の丹精じやあないか。寝さしておいて、謠を教えさしたつて一廉の役には立つのに、お金子だといや直ぐあれなんだもの。考えてみりや心細いよ。」

思わず涙さしぐみぬ。十年の末はよも待たじ、いま早や渠は病あり。肩寒げに悄れたる、その状ぞ瞻らるる。

「姉さん、私は、私はどうなるんだろうね。」

小親はハツとせし風情にて、顔をあげしがまたうつむきぬ。

「堪忍しておくれ、もう私やそういわれると、申訳のしようがないよ。つい、手前勝手で、お前さんを私が処へ引張つておいて、こんなに甲斐性がないんだものね。あの時お雪さんの方へ行つておいでなら、またこんなことにならなかつたかも知れないものを。つい何

だか、お前さんをば人ン処へやりたくなかったの、……それも分別がある人なら、そりや、私とお前さんと両方で半分ずつ悪いんだから可いけれど、東西もお分りでなかったものを、こんなにしてしまつてさ。そして心配をさせるんだから、皆私が悪いんだね、本当に、もうどうしたら可かろうね。」

「^{いた}太く激したるようなりき。さりとは思ひ懸けざりし。心も急^せきて、

「何だね、何も、そんな気で言つたんじやあないんだのに。」

四

「いいえ、お前さんはきつと腹を立つておいでだよ。堪忍して下さい、よう後生だから。毎日々々果敢^{はかな}いことが有るけれど、お前さんの顔を見たり、ものをいうのさえ聞いてれば、何にも思わないで、私や気がはずむんでね、ちつとも苦勞はしないけれど、そりや私の、身勝手だった。御免なさいな。」

と身を顫^{ふる}わして涙を呑む。われはその膝おさえたり。

「姉さん、何が気に障りました。何だつて、私がそんなこと思います。宿なしの、我^{わが}まま

ものを、暑さ、寒さの思いもさせないで、風邪ひとつおひかせでない。お母つかさんに別れてから、内に居ちやあ知らなんだ楽しいことも覚えさして下すつた。伯母さんと居た時は、外へばかり出たかつたに、姉さんとこう一所になつてから、ちつとも楽屋の外のことは知らなくつて済むようにして、こんなに育てておくれたもの、何が私に不足があるえ。そりやお雪さんのことは……何だつたから、だから、謝罪あやまつたじゃあないか。先刻さつき云つたのはちつともそんな感じやアありません。何だか心細い事おいだから、嘘にもそんなこと云つて私を弱らして下さるなつて、そういうつもりだつたのに、悪く取つたのかね、まだ胸にやあ済まないかい。」

縫すがりつきて、

「ひがむんだね、ああ、つい、ああもしてあげよう、こうもしてあげて、お前さんの喜ぶ顔が見たいと思うことが山ほどにあるけれど、一ツも思うようにならないので、それでつい僻ひがむのだよ。分りました。さ、分つたら、ね、貢さん、可いいかい、可いいかい。」

「だつてあんまりだから。」

「ほんとはお前さんが何てつたつて、朝夕顔が見ていたいの。そうすりやもう私や死んだつて怨うらみはないよ。」

「まあ！」

「いいえ、何の、死んだって、売られたって、観世物みせものになったって、どうしたって構うものかね。私や、一晩でもお前さんとこうしていられさえすりや。」

「そんなこと云つちやあ厭だ。」

分れて坐したり。

「じゃあ、もう詰つまらない事はいいツこなし、気をしつかりして、私がきつとお前さんに心配はさせないよ。そのかわり私が煩わづって、悲しいめにあうことが——あつたらばね。」

またその声を曇曇らせしが、

「甘えさしておくれ。可いいかい。ちよいとでもお前さんに甘えさしてもらいさえすりや、あとはどうなつたって、構うものか。したいようにするが可いや。もうもう、取越苦勞とこなんざしないでおこうね。」

「ああ。」

「極きめた！」

急に坐り直して、

「あら、もう火が消えたよ。」

小親はいそいそ灰のなか搔探して、煙管取って上げたるが、ふと瞳を定めて、室の隅、二ところ見廻したり。

「おや！ 鳩はどうしたろう。」

われもまた心着きぬ。さきに一たび姉上のことを思い断たむとしたりし折、広岡の家に悲しき叫び聞えしは、確に忘れず、その人なりし。われわれとおなじにかの猫の鳩くわえしを見たまいしならむとのみ、仮りに思い棄てたれど、あるいはさもなくて、何等かの憂目に合わせたまうならずや。酷き養子のありといえば。また更に胸の安からず。

五

小親はなお頻りにあたりを見廻して、

「変だよ、ちよいとお前さんも見たろうね、何だか私や茫然してたが、たしかあの猫が鳩をくわえて飛込んだつけね。変な気がするよ、つい今しがたの事だった。」

「ああ、私はまた、またいうと何だろうけれど、お雪さんの（あれッ）てった声が聞えたようだね。」

「気のせいだよ、そりや気のせいだろうけれど、はてな、一体どこから飛込んだらうね。」

「井戸の処さ。」

「井戸だえ……」

わが顔の色見て取りたり。小親は寂しき笑^{えみ}を含みて、

「可^いいよ、どうせ心配をさせないと言ったこつた。貢さん、ついでにその心配もさせないから、もう案じないが可^いよ。」

「何の心配さ。」

「お雪さんのことさ。」

「その事なら、もう。」

「いいえ、そうじゃあないよ、一旦^{いったん}は何、私だつて、先刻^{さつき}のように云つたけれど、お前さんの心配をすることだもの、それに、どうせ、こんなからだだから、お前さんさえ愛想をお^{つか}尽しでないことなら、もうどんなにでも私やならうわね。構うものかね、なに構やあしない。」

かかる女^{ひと}に何とてさることをさせらるべき。わが心はほほ定まりたり。

「そんなに云つておくれだと、なお私は立つ瀬がない。お雪さんも何だけれど、※さんが

何だもの。」

「何だえ、貢さん。」

「何でもいいよ。」

「可よかアありません。」

「可かアありませんたつて、何もわるいこつちやあない。」

「じゃあまあそうさ。しかしどうにかするよ、私や、そのまんまにしちやあおかないから。」

「あすのこと……そして姉さん冷えちやあまた悪いだろう。」

われは独り自由にものおもわむと欲せしなり。

小親は軽くうなず頷きつつ、

「また心配をさしちやあ悪いね。」

「だからさ。」

「あい、じゃあ、お前さんもおやすみだと可い。」

棲つま引合せて立上れり。

「しのぶや、……む、もう寝たそうな。」

戸口にて見返りながら、

「貢さん、床は私が取つてあげよう。」

「なに、構わないよ。あとで敷かせるから。」

「うち、
打うなずきさま微笑^{ほほえ}みたり。」

「邪魔だったら、あっちへおいで、稲ちやんと一所に寝ましよう。」

「のちほど。」

「それじゃあ……」

とて立出でたる、後姿隣の室^まの暗きなかに隠れしが、裾花^{すそ}やかに足白く、するすると取つて返して、

「貢さん！」

顔をあげてぞ見たる、何をか思える、小親の、憂慮^{きづか}わしげなる面色^{おももち}なりしよ。

「また、鼠とでも話すのかね。」

「考えてるの。」

「そんなこと云わないで、鼠とたんとお楽しみ。ほほほ、私は夢でも見ましようや。」
と横顔見せて身をななめに、此方^{こなた}を見てなお立ちたりしが、ふと心着き耳傾け、

「あら！ 狐が鳴いてるよ。」
と、あだなる声にていいすてつつ、すらすらと歩み去りぬ。

峰の堂

一

あれという声、啊あなやと姉上の叫びたまいしと、わが覚ゆる声の、猫をば見たまいて驚きたまいしならば可よし。さなくて残忍なる養子のために憂目うきめ見たまいしならばいかにせむ。それか、あらぬかとのみ思い悩みつつ、われは夜半よわの道を行ゆくなりき。

小親おなじと同一樂屋おなじに居て、その顔見つつありては、われ余りに偏して、ただものに驚かせたまいしよと思ひ棄つるようになりがちなればぞ。

窓を透すかして、独居ひとりの時、かの可哀あわれに昔生こけおいたる青楓の材を見れば、また姉上の憂目を訴えたまいしがごとく思われつつ、心太いたく惑つむりいて脳の苦しきが、いずれか是なる、いずれか

非なる。わが小親を売りにて養子の手より姉上を救い参らせむか、はた姉上をさし置きて、小親とともに世を楽しく送らむか、いずれか是なる、いずれか非なる。あわれわれこの間に死していかせむと、手を拱こまぬきて歩あり行くなりき。

しずかに考え決さだむとて、ふらふらと仮小屋を。小親が知らぬ間に出でて、ここまで来つ。山の手の大通りは寂せきとして露冷ひややかなり。

路すがらいかなるものにか逢いけむ、われは心着かざりし。四辺あたりには人の往来絶えて、大路の片隅に果物売の媼おうな一人露店出して残りたり。三角形なりの行燈あんどんにかんてらの煤煙ばいえん黒く、水菓子と朱の筆もて書いたる下に、粟うずたかを堆みかんく、蜜柑、柿の実など三ツ五ツずつ並べたり。空には月の影いと明あかるきに、行燈の燈幽ともしずかなれば、その果物はみな此方こなたより小く丸く黒きものに見ゆ。電信の柱長く、斜ななめに太き影の横よこうたるに、ふと立たちどま停りて、やがて跨またぎ越えれば、鳥の羽音して、高く舞い上り。星は降るごとし。あなやと見れば、対岸なる山の腰に一ツ消えて、峰の松の姿見えつ。われは流ながれに沿ようたりき。

岸には推おしならべて柳の樹植えられたり。若樹こすえの梢こすえより、老樹の樹こまの間に、居い所ところかわるがわる、月の形かからむとして、動くにや、風の凪なぎたる柳の枝、下垂れて流れの上に揺ゆめきぬ。

来かかる人あり、すれ違ひて振向きたれば、立停りて見送るに、われ足疾あしばやに通り過ぎつ。

柳は早うしろの方遥かほるかになりて、うすき霧のなかに灰色になりたる、ほのかに見ゆ。松の姿の丈高きが、一抱ひとかかえの幹に月を隠して、途上六尺、隈暗く、枝しげき間より、長き橋の欄干低く眺めらる。板の色白く、てらてらと対なる岸に懸りたり。

その橋の上に乗りたるよう、上流の流れ疾く白銀の光を浴び、蛭うねりに蒼あおみを帯びて、両側より枝蔽おほえる木の葉この中より走り出でて、颯さと橋はし杭くいを潜り抜け、来こし方かたの市まちのあたり、ごうごうと夜深よき瀬の音ぞ聞えたる。

わが心は決さだまらで、とこうしてその橋の袂たもとまで来りたり。ついでなればと思ひて渡りぬ。

木津は柿の實の名所とかや。これをひさぐもの、皆女むすめにて、市いちよりおよそ六七里隔たりたる山中の村よりこの橋の上に出で来るなり。夜更けては帰るに路みちのほど覚束おぼつかなしとて、商あきなして露店しまえば、そのまま寝て、夜明けてのち里に帰るとか。紫の紐結ひもびつつ、一樣に真白ましろき脚絆きやはん穿きたるが、足を縮め、筵むしろもて胸を蔽い、欄干に枕して、縦横に寝まりたる乙女等五七人、それなるべし。尽く顔ことごとに蓋ふたして、露いとを厭いとえる笠かさのなかより、紅くれなの笠の紐ひも、一二条ふたすじしなやかに、肩より橋の上にまがりて垂れたり。

小親も寝たらむ、とここにて思いき。

二

われは一足立戻りぬ。あれという声、啊呀あなやと叫びたましい声、いかでそのままに差置き
て、小親と楽しく眠らるべき。

いま少し、いま少し、仮小屋と広岡の家と楓の樹と、三ツともにある処に、いま少し、
少しにても遠く隔りたらば、心の悩ましき忘れむ。

渡り越せば、仮小屋とハヤ川一ツ隔たりたり。麓ふもと路は堤防どてとならびて、小家こいえ四五軒、
蒼あおしろ白しろきの夜の色に、氷のなかに凍いてたるが、透すかせば見ゆるにさも似たり。月は峰の松
のうしろ後になりぬ。

坂道にのぼりかけつ。頂にいたりて超然として一眸いちぼうのもとに瞰みおろ下さば、わが心高きに
居て、ものよく決さだむるを得べしと思いて、峰にのぼらむとしたるなり。

歩を攀よずる足のそれよりも重かりしよ。搔ない撫なずる掌たなそこを、吸い取るばかり、袖たもと、袂たもと、太
く夜露に濡れたり。

さて暗き樹の下を潜り、白き草の上を辿り行く。峰は近くなりぬ。

路の曲りたる角に石碑あり。蓮の花片の形したる、石の面に、艶子之墓と彫りたるなり。

貴き家に生れし姫の、継母に疎んじられて、家をば追われつ。このあたりに隠れすみて里の子に手習教えていたまいしが、うらわかくてみまかりたまいしとか、老いたる人の常に語る。苔深き墳墓の前に、桔梗やらむ、萩やらむ、月影薄き草の花のむら生いたるのみ。手向けたる人のあとも見えざるに、われは思わず歩を留めぬ。

あわれ広岡の、姉上は、われにいかなる女ぞ。小親をだに棄つれば救わるべきをと、いと強く胸を拍つて叫ぶものあり。

草に坐して、耳を傾けぬ。さまざまのこと聞えて、ものの音響き渡る。脳苦しければ、目を眠りて静に居つ。

やや落着く時、耳のなかにももの聞ゆるが、しばし止みたるに、頭上なる峰の方にて清き謡の声聞えたり。

松風なりき。

あまり妙なるに、いぶかしさは忘れたるが、また思い惑いぬ。ひそかに見ばや、小親を

置きて世に誰かまたこの音の調をなし得るもので。

身を起して、坂また少しく攀じ、石段三十五階にして、かの峰の松のある処、日暮の丘の上にぞ到れる。

松には注連縄張りたり。香を焚く箱置きて、地の上に円き筵敷きつ。傍に堂のふりたるあり。廻廊の右左稲かけて低く垣結いたる、月は今その裏になりぬ。

謡は風そよぐ松の梢に聞ゆ、とすれど、人の在るべき処にあらず。また谷一ツ彼方に謡うが、この山の端に反響する、それかとも思われつ。試みにソト堂の前に行きて——われうかがいたり。

伸びあがりて密にすかしたれば、本堂の傍に畳少し敷いたるあり。おなじ麻の上下着けて、扇子控えたるが四五人居ならびつ。ここにて謡えるなりき。釜かけたる湯の煙むらむらとたなびく前に、尼君一人薄茶の手前したまいぬ。謡の道修するには、かかることもするものなり。覚えあれば、登音立ててこの静き損なわじと、忍びて退きぬ。

山の端に歩み出でつ。

と見れば明星、松の枝長くさす、北の天にきらめきて、またたき、またたき、またたきたる後、拭うて取るよう白くなりて、しらじらと立つ霧のなかより、麓の川見え、森の影

見え、やがてわが小路ぞ見えたる。襟を正して曰く、聞け、彼処かしこにある者。わが心さだまりたり。いでさらば山を越えてわれ行かむ。慈み深かりし姉上、われはわが小親と別るこの悲しさのそれをもて、救うことをなし得ざる姉上、姉上が楓のために陥りたまいしと聞く、その境遇に報い参らす。

明治二十九（一八九六）年十一月〜十二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成3」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二卷」岩波書店

1942（昭和17）年9月30日発行

※誤植の確認には、底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：酔いどれ狸

2013年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

照葉狂言

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>